小須戸町文化財調査報告(2)

大沢谷内遺跡

発堀調査報告書

1989

小須戸町教育委員会

例　　言

1. 本書は、新潟県中蒲原郡小須戸町大字天ケ沢新田地内に所在する、奈良・平安時代の遺跡の発掘調査の記録である。

2. 本発掘調査は、当遺跡内に予定された農免道路建設に伴なって破壊されることになった部分の調査であり、これを記録保存するために実施された。

3. 調査範囲はA、Bの2地点に区分され、かつ、当建設工事の進行状態との関連で2ケ年にわたって行なわれた。また、本調査に先行する2次にわたる確認調査とを合わせて、それぞれの概況報告が成されている。

4. それぞれの調査期間は、次の通りである。

第1次確認調査	1988年7月4日～同6日
第2次確認調査	1988年7月14日～同15日
B地点の調査	1988年11月4日～同6日
A地点の調査	1989年4月12日～同21日

5. 出土遺物には、遺跡名のOYと出土地点を次の如く記入し、小須戸町教育委員会がこれを保管する。注記　記号例『OY ○○○』

6. 発掘調査関係者は次の通りである。

調査主体者	小須戸町教育委員会教育長　椿　克己		
調査担当者	川上貞雄（日本考古学協会員）		
調査員	杉本恵子		
	田中順子		
事務局	小須戸町教育委員会社会教育係		
	青木達男		
調査参加者	平間安雄	高橋鉄雄	城丸三太郎
	横山義衛	土田九吾	斉藤ツイ
	横山ミヨ	城丸リツ	土田ヨキ
	今井金治	城山スミ	

1 序　　章

1） 遺跡と調査に至るまでの経過

大沢谷内（おおさわやち）遺跡は、新潟県中蒲原郡小須戸町大字天ケ沢新田字丸山922番地、同字大沢谷内729番地を中心に展開する古代の遺跡である。その位置は鎌倉新田部落の北北西寄りの水田内の低湿地帯にあり、現在の水田面の標高は3.8ｍ程で、遺跡の確認面は水田面下50㎝前後に位置する。

昭和55年、新潟県教育庁の遺跡詳細分布調査結果によれば、この地域に大沢谷地遺跡、丸山遺跡、忍ケ島遺跡の三遺跡が登録されている。次いで、60年８月付の同調査カードには、「丸山、大沢谷内、忍ケ島、三軒屋敷の４遺跡であったところを分布調査により、１遺跡にしたもの」とあり、その範囲は東西500ｍ、南北700ｍを指定している。ともあれ、かなりの広大な遺跡が埋蔵されていることは確実と思われ、この範囲内の各所における須恵器、土師器などの遺物の出土地点が記録されている。このことから現在では60年８月の調査カードにより、単独の遺跡とされている様だ。

ところで、それ以前の調査カードによれば、当遺跡が昭和32年に行われた水田の暗渠工事によって遺物が検出され、遺跡と確認されたことが記されている。さらに現時点までに検出された遺物は、須恵器の丸底壺、高坏、甕、坏及び土師器であると記録されている。

昭和63年、この遺跡内に大規模農道（農免道路）の建設が予定され、遺跡の記録保存のための発掘調査が行われることとなった。調査は、当遺跡の範囲及び内容を把握し、本調査に向けての資料作成を目的とする遺跡の確認調査に始まった。その結果、道路予定地のうちFig.２に示したＡ、Ｂの２地区について本調査を行うこととなり、２年次にわたって調査が行われ、本書はその記録である。なお、確認調査における記録は『大沢谷内遺跡確認調査結果』として報告書がある。

ところで当調査は、調査担当者の都合や耕作上の都合などで、Ａ地区、Ｂ地区をそれぞれ別時点に行われることとなり、結果は昭和63年11月におけるＢ地区の調査と、平成元年４月におけるＡ地区の調査の２次に分けて行われることとなった。

ごく小規模の調査とは言え、２ケ年に亘り快く御理解、御協力を賜った土地所有者の各位をはじめ、御指導、御助言いただいた県教育庁文化行政課、その他多くの方々に謝意を述べるものである。

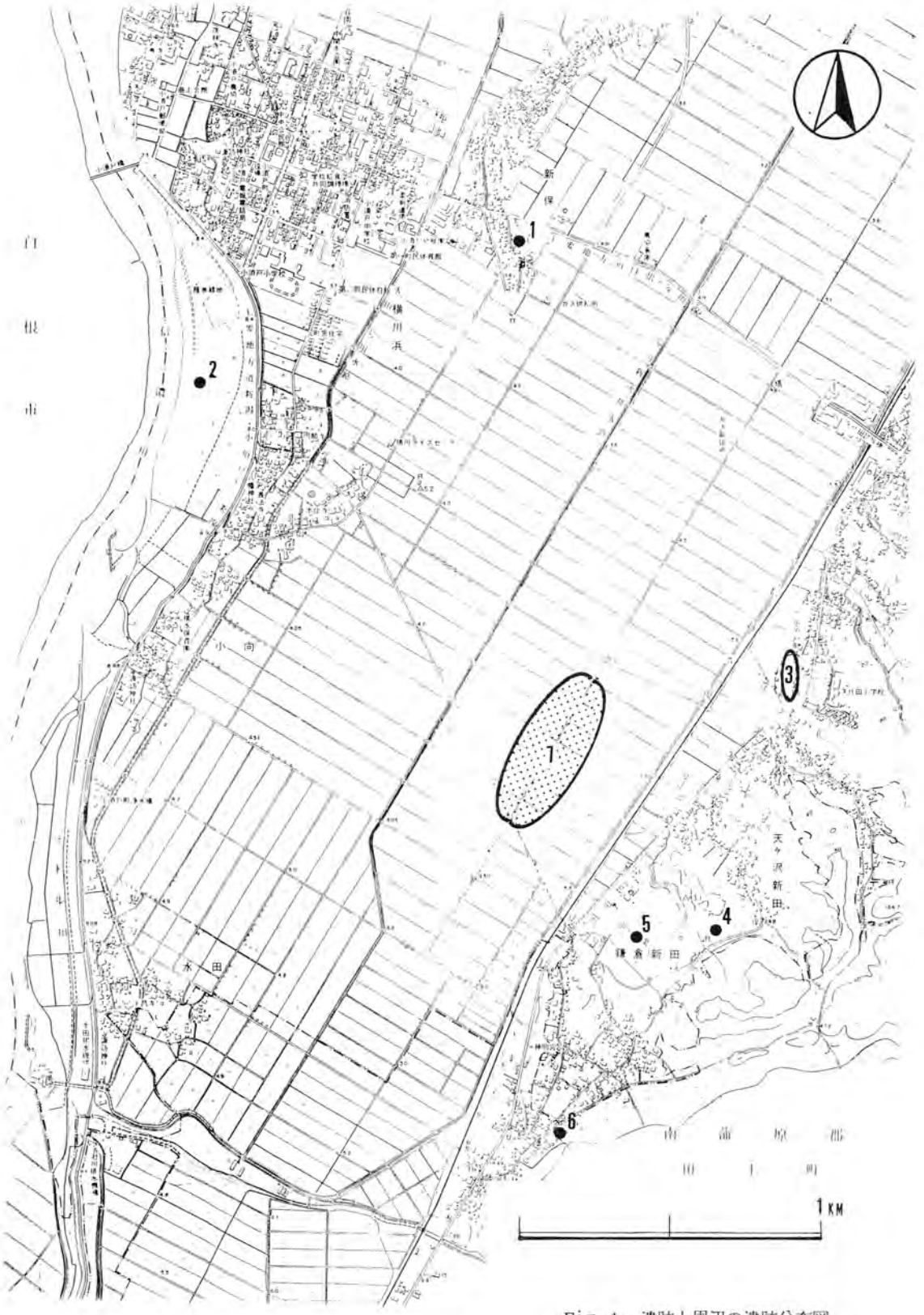


Fig. 1　遺跡と周辺の遺跡分布図

表　1　周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名称	所在地	種別	遺物	時代
1	東腰付	小須戸町新保字腰付142他	遺物包含地	須恵器	古代(飛鳥・奈良)
2	横川浜堤外地	小須戸町横川浜字忍ケ島	遺物包含地	縄文土器・土師器 須恵器・中世陶器	縄文後期～中世
3	五本田館	小須戸町矢代田字本地	城館跡	青磁	中世（室町）
4	西紙屋山	小須戸町天ケ沢新田字紙屋山	城館跡		
5	六兵衛沢窯跡	小須戸町天ケ沢新田字六兵衛沢	須恵器窯跡	須恵器	古代（平安）
6	長福寺跡	田上町湯川字長福寺	寺院跡	土師器・仏像	中世
7	大沢谷内	小須戸町天ケ沢新田字大沢谷内	集落跡	土師器・須恵器	古代(奈良・平安)

2）　遺跡と周辺の遺跡

新潟平野を貫く大河、信濃川が新津丘陵に最も接近して北上する地点から北東に広がる一帯が小須戸町である。現状の集落、街並みは大河の自然堤防上と考えられる地帯の水田、小向、横川浜、小須戸と、一方丘陵沿いの鎌倉新田、天ケ沢新田、矢代田などに2分され、中間部分が広大な水田地帯である。おそらく有史以来の低湿地帯だと考えられていた。前項に示した如く、本遺跡はこの低湿地帯の真中に位置している（Fig・1参照）。この位置は、かつては冠水地帯であろうと考えられ、また現状では冬の西風をさえぎるものもない。Fig. 1に示した遺跡分布図は、小須戸町地域内に限られたため、この低湿地帯に本遺跡のみが位置する結果となったが、実は南側の田上町、北の新津市においても同様の環境地帯にほぼ同時代の遺跡が点在するのである。

ところで、小須戸町地域の遺跡は分布図に示した6遺跡の他、6遺跡が周知され、いずれも矢代田地区に位置する。それらは次の如くである。

1. 三沢原遺跡　　縄文時代　　湮滅
2. 円塚古墳　　古墳時代　　円墳
3. 九ツ塚　　古代～近世　　1基発掘調査　2基残存
4. 三沢製鉄跡　　古代～中世
5. 館木戸　　中世　　城館址
6. 了専寺跡　　寺院址

この様に、すでに湮滅したものを含めて12遺跡を数えるにすぎず、非常に少ない。しかしながら隣接する田上町・新津市には、それぞれ各時代に亘る種々の遺跡が多く見られることであるから、たまたま同じ環境ではあるが、空白地帯であったに過ぎないことと、地積の少なさからも言えよう。

各時代の遺跡の立地等は、一般的にも言えることであろうが、特に新津丘陵と、丘陵に面した

平野部を有する田上町や新津市南部における遺跡の分布を基にして見ると次の様である。旧石器時代の遺跡は確認されていないが、遺物は新津市の山腹、山頂で検出されている。新潟平野に面した地帯での遺跡はごく稀である。縄文時代の遺跡は山麓の台地上に多く立地する。平坦部の多い田上町が遺跡数も多い。弥生時代になると遺跡はわずかしか発見されていない。稲作のため低地に定位すると考えられているが、後期には戦乱のため、新津市八幡山遺跡の様に山頂における「高地性集落」が営まれる様になった。田上町の中店遺跡も山頂であり、弥生の祭祀遺跡である。古墳時代の遺跡は現在のところ新津市古津地区に見られるが、八幡山の山頂から山腹、そして山麓台地に広がりを見る。やがて信濃川に近い低湿地帯にも見られる様になる。そしてこの時代の営みの特徴である古墳の造営は、やはり山頂部にはじまり、山麓台地へと降りるかに思われる。新津市には初期の古墳と考えられる前方後方墳と、中期の巨大円墳が八幡山の山頂にあり、田上町の山頂にはエゾ塚古墳群がある。矢代田字塚山の円墳は山麓の広大な台地上に立地している。本遺跡とほぼ同時代の古代（奈良・平安時代）の遺跡は、山麓台地の端部と、低湿地帯における微高地と推定されるところに多くが立地する。そしてこの時期、それ以前の遺跡数に比較してそれこそ爆発的な勢いでその数を増すことになる。また本遺跡と同様に丘陵からあまり遠くない位置に立地するものが多い。田上町の長沢遺跡、二段あげ遺跡、ガンゴウ寺遺跡、新津市の中郷遺跡、北郷遺跡などが同様の環境下に立地し、さらに低地である新津市小屋場地区や川根地区に川根遺跡群、下梅ノ木遺跡、曽根遺跡、小戸下組遺跡、西沼遺跡、長左衛門沼遺跡などの遺跡が展開する。また台地の端部にも田上町では下屋敷遺跡、新津市には桜大門遺跡、大坪遺跡、古津駅前遺跡などがある。この時代、各地に須恵器の生産が行われ、小須戸町では六兵衛沢須恵窯址が報告されている。現在この窯址の出土遺物を柏大治氏が所蔵すると知るのみで、多くの研究者がこの窯址を確認出来ないでいる。須恵窯址は群を成すものがほとんどである。新津丘陵には東側に七本松窯址群が存在し、やゝ離れた五泉市山崎に古手の山崎須恵窯が存在する。一般には「一群一窯址群」と言われているが、小須戸以南では長岡市間野窯址までその所在を知り得ない。三沢製鉄遺跡は中世として遺跡台帳に記載されているが、ここでは古代または中世とした。古代の蒲原郡の大勢力を支えた鉄生産が新津市金津の製鉄遺跡群である。八幡山からお茶山にかけての広大な一帯が、それこそ全山が製鉄関連遺跡なのである。三沢製鉄遺跡はこの延長に過ぎないものと考えている。中世に入ると一般の集落は良く知られておらず、わずかに新津市大鹿周辺に遺跡を見るにとどまり、田上町でも堂屋敷遺跡などの祭祀遺跡が主となる。変わって山城、砦がいたる所に見られ、それに伴なう居館址が麓にある。今さら言うまでもないことであるが、護摩堂城址はその筆頭に当り、なおかつ山城と居館の両機能を有していたものである。本遺跡はこの様により広い範囲のなかで相互に関わりながら営まれていたものである。

3） 発掘調査地点と層序

a） 発掘調査地点

本遺跡の推定範囲は実のところ不確定であり、Fig.1 に示した地点の西側に向かってさらに広

がるかも知れない。ともあれ、図示した範囲内の中央部を北東から南西に走る農道の拡幅工事が対象となる位置である。前述したところの遺跡範囲の確認調査に基づけば、Fig.2に示した様に、南側のA地点と北側のB地点が調査対象範囲とされ、中間部分は湿地帯で遺構の痕跡はない。大規模農道の計画幅員は8.5 *m*であり、現況幅員は6 *m*弱である。また、現状の農道中心部の深層には、北陸ガスの幹線パイプが埋設され、すでに遺構は破壊されている。このことから調査範囲は道路の左右の肩部と法線内の水田面となり、東側は2.2 *m*、西側は3.5 *m*幅の調査範囲が指定されたが、工事・調査・農作業等の調整がむずかしく、実際には西側の道路肩部を予定通り掘削することは出来なかった。

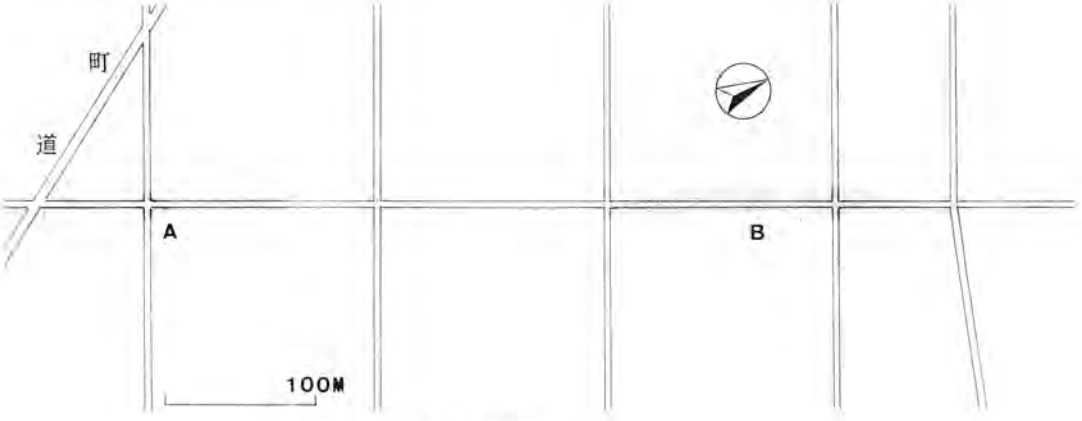


Fig. 2　発掘調査範囲図

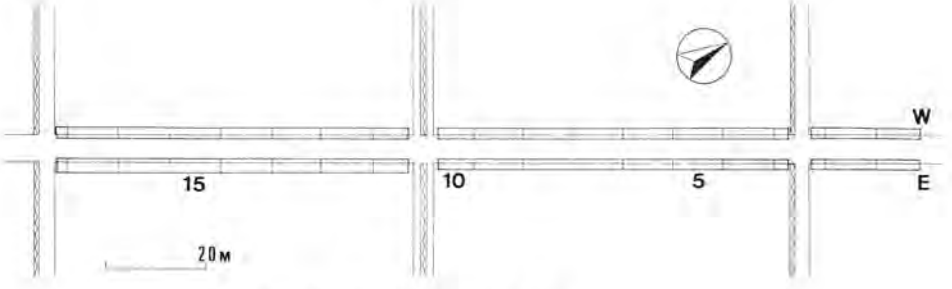


Fig. 3　B地点 グリット設定図

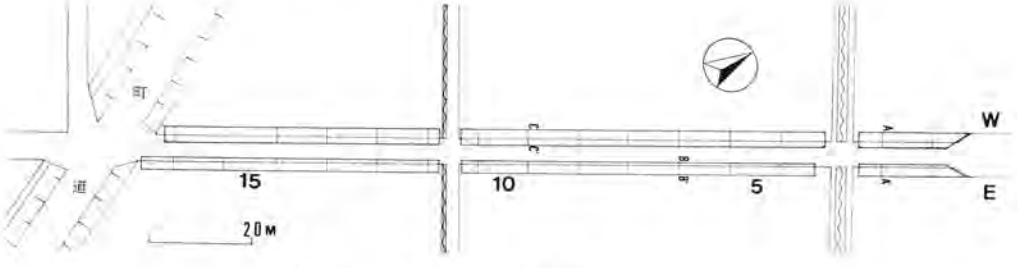


Fig. 4　A地点 グリット設定図

b） 発掘区域の設定

発掘調査の範囲は、前述した如く東側2.2 m、西側3.5 mで、その長さはA地区は165 m、B地区は171 mである。A、B地区共に東側をE列、西側をW列とし、南北には10 m単位を1区画とし、北側よりそれぞれ1、2、3と呼称した。なお、この基点はA地区は北側排水路に掛かる橋の南側、B地区は中央排水路の中をもってこれに当てた。

c） 地層序列

発掘調査の予定地が現況の農道に沿って行われると言うことで、この範囲にはほとんど旧状をとどめた地層は少ない。その大部分は撹乱層である。この地域の農地の改良事業は昭和15年に行われ、現況の農道の盛土は道沿いの水田を掘って造成されたもので、

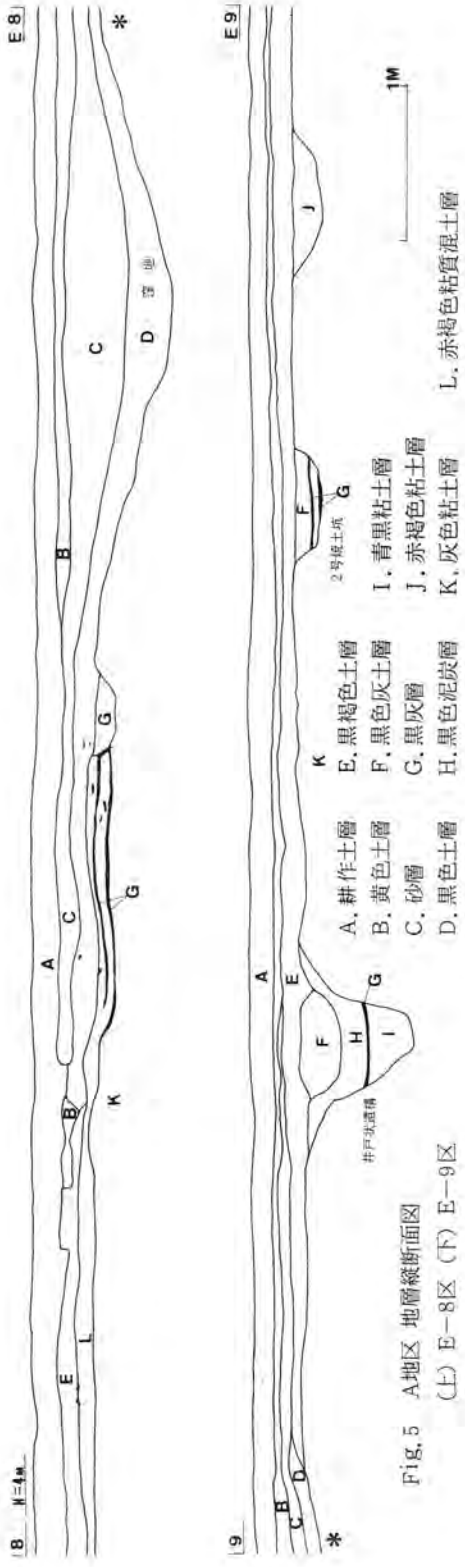


Fig. 5 A地区 地層縦断面図
(上) E－8区 (下) E－9区

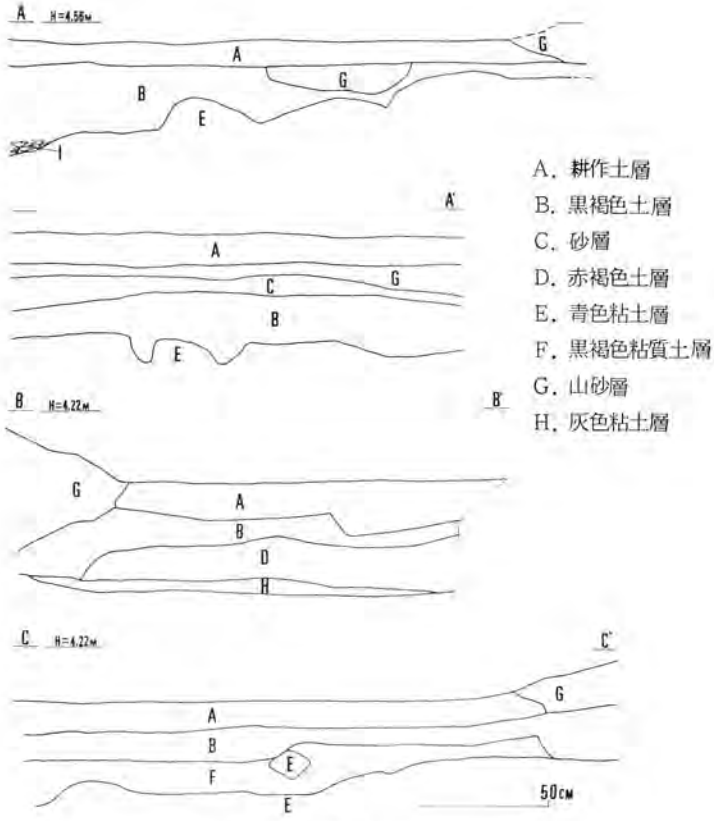


Fig. 6 A地区地層横断面図

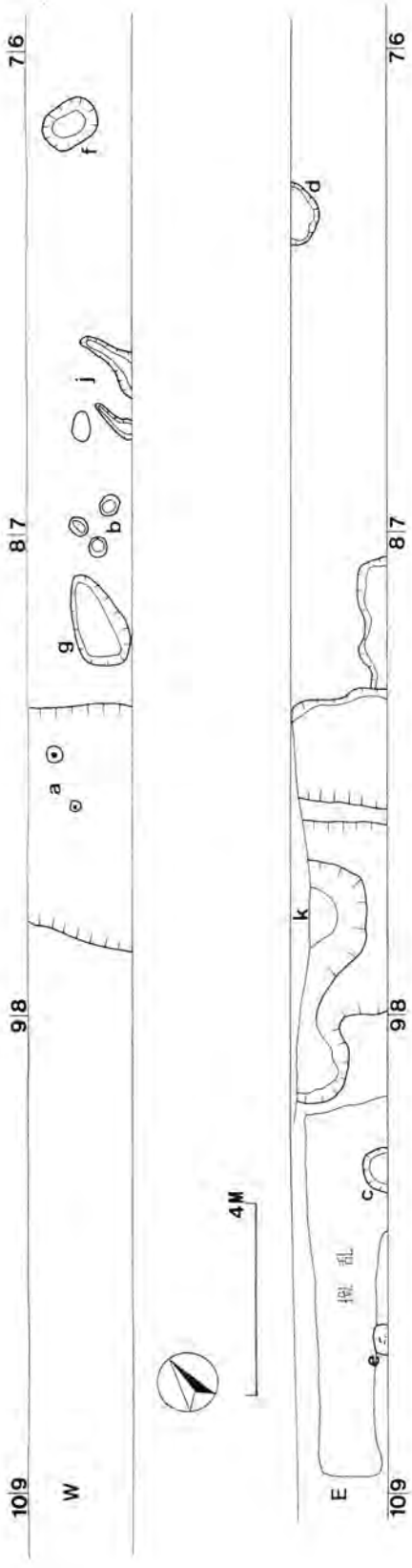


Fig. 7　EW7～9　全測図

遺物包含層及び遺構構成面の大地を失なっている。特に道路の交叉する周辺は深掘りを余儀無くされたことがわかる。これらの深掘りの部分は山土、砂、ゴミによって埋められ、耕作土を被せられている。この様なことから遺物包含層や遺構面を残す部分は、A地区では断片的であるが、W－7、8区、E－7、8、9及び15、16区に見られるのみで、B地区ではW－5区で、ピット（柱穴）状のものが1基かすかに残存したのみであった。

Fig.5、6に地層の断面を示したが、前述した様なことから、地層々序としては不安定なものである。だが、基本的には①耕作土、②黒褐色土又は黒色土の遺物包含層、③赤褐色土（遺構検出層）、④シルト層、⑤砂質粘土層と考えられる。いま④以下はA、B両地点における各1ケ所のテストピットによるものであり、シルトは地表面より70㎝から130㎝までその下の砂質粘土層は少なくとも50㎝以上がある。なお、A地区とB地区間は第3層には泥炭層となり、湿地を呈していたことが知られる。

2　遺　　構

前項に記述した様に、遺構の検出は非常に少なく、小範囲に限られたが、これは道路沿いの地域が農地整理事業によって破壊されていたことによるもので、遺跡自体が希薄な遺構と言うことではない。遺構はFig.7に示した如く、A地区ではE、W－7～9区に集中し、E－15、16区でわずかに破壊をまぬがれたものが見られる。B地区ではW－5区に小ピットが1基検出されたに過ぎない（PL2－1参照）。

a）柱　列（Fig.8、PL3－1）

W－8区のほぼ中央部分に掘立柱の残根列がある。北方向に位置するが、地図上の方位とは東に9度振れている。Fig.8に示した様に2本の柱は深さ15㎝程の窪みの中に位置するが、柱と窪みとは直接関係

ないものと考えられ、南側柱の残根の浮き上がり状態からみて、後世の掘り込みと見られよう。２本の柱間は１ｍを計り、柱の太さは最大径22㎝と15㎝を測る。柱穴は、柱の太さに合わせたかの如く北側のものは太くて深く、一方は細くて浅い。その計量は上部が一定ではないが、口径55㎝と28㎝、深さは70㎝と42㎝である。この２本に連結する柱穴を検出することは出来なかったが、柱の太さから見てもかなりの大きさの建物を想定することが出来る。

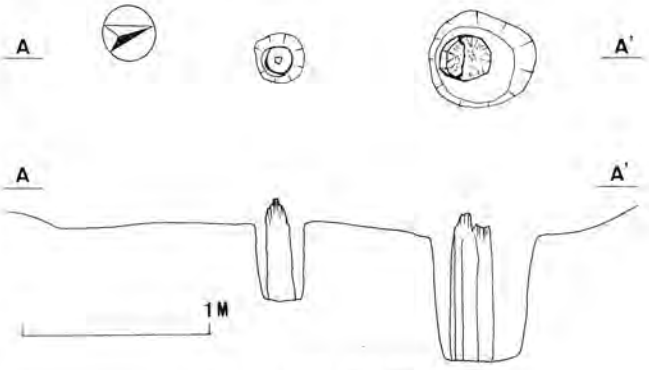


Fig. 8　柱列 平断面図

b）ピット群（Fig.9、ＰＬ３－１、２）

Ｗ－８、７の接点に３基のピットがある。この内、１基は70㎝の深さを持つが他は12㎝程で、ピットとは言いがたいものである。この内、深いピットの中間に木器の底板と思われる丸板や須恵器坏が検出され、柱穴と考えるよりは蓄蔵穴的なものと考えられる。これらの遺構は距離的に見て、前述の建物址の範囲内に充分入り込む位置にある。

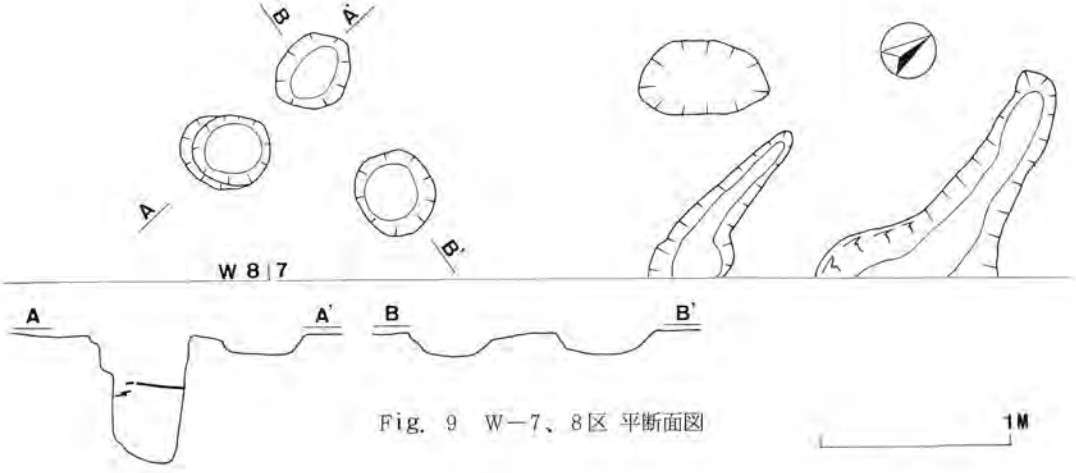


Fig. 9　Ｗ－７、８区 平断面図

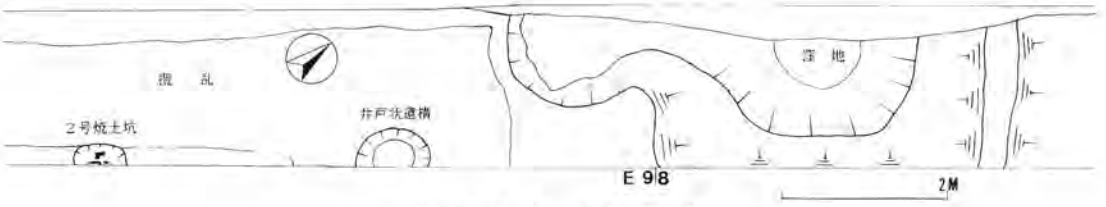


Fig. 10　Ｅ－８、９区 平面図

c） 井戸状遺構 （Fig.10、ＰＬ４－１）

Ｅ－９区の東壁面に井戸状遺構がある。内部施設は、全く見られない素掘りの土坑である。改めて図示しなかったが、その断面はFig.５のＥ－９区左側に示したものがそれである。井戸上部の口径はかなり崩壊しており、旧状をとどめていないが、幸いなことにこの遺構は上部に25㎝程の厚い灰層があり、遺構を埋めもどしたことが伺える。この灰土層の径を以って孔の径は70㎝と知り得る。底部は30㎝と先細りとなり、深さは73㎝を測る。前述の建物址の南方11ｍに位置する。なお、周囲は土取りにより浅く撹乱されている。

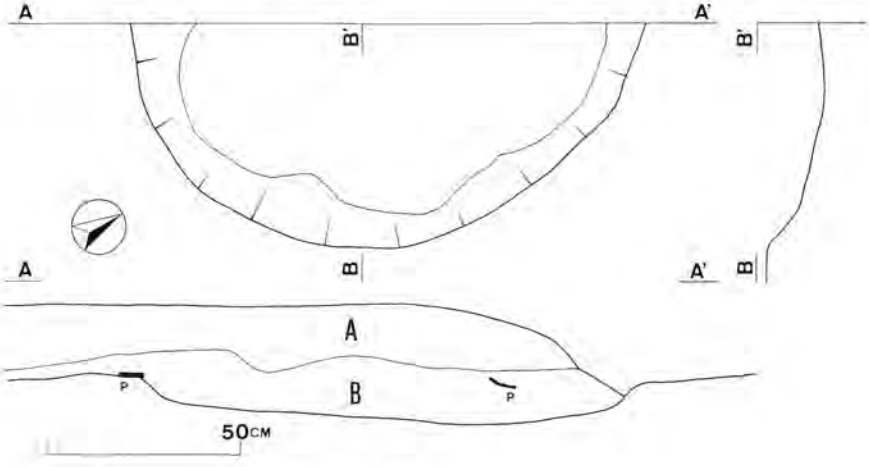


Fig. 11 １号焼土坑

d） １号焼土坑 （Fig.11、ＰＬ４－２）

Ｅ－７区西壁面に位置し、２分の１強を検出した。南北方向に長軸を持つ楕円で、長径は110㎝程と推定される。深さは約10㎝程であるが、坑内及び上部、周辺にも厚い炭灰を多量に混えた土で覆われている。壁面、床面の焼けはほとんど見られない。少量の土器片が灰土に混入している。

e） ２号焼土坑 （Fig.10）

Ｅ－９区東壁に位置し、２分の１強を発掘した。円形の焼土坑で口径70㎝、底径50㎝、深さは17㎝である。灰層と炭灰混土層がそれぞれ２層づつの堆積をなしている。１号同様に壁面、床面の焼具合は低い。炭灰層の上部に多くの土器片が検出された。

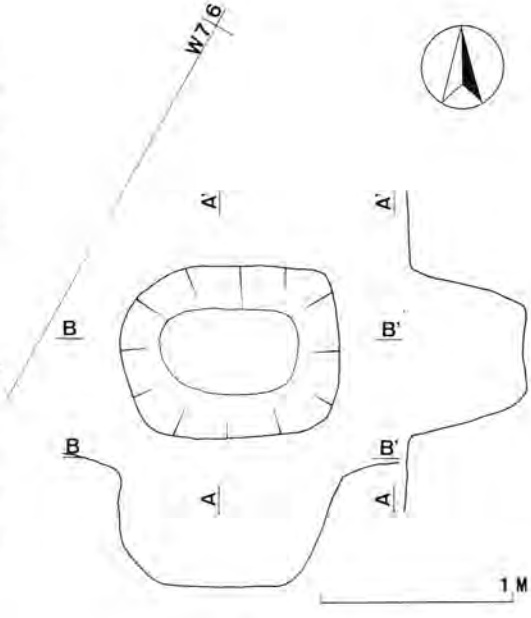


Fig. 12 １号土坑

f） 1号土坑 （Fig.12）

W－7区に位置し、隅丸の長方形を呈する。東西に長軸を有し、口径は230×85㎝、底径は165×90㎝、深さは120㎝で底部は平坦である。

g） 2号土坑 （Fig.13）

W－8区に位置する浅い窪みである。南北に長軸を持つ変形の楕円で、長軸210㎝、短径110㎝、深さは13㎝で底面は平坦である。

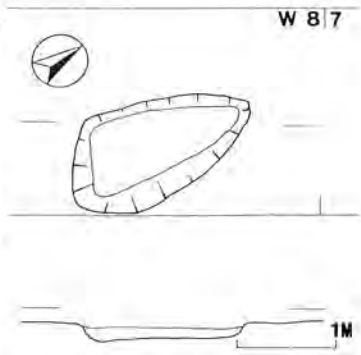


Fig. 13 2号土坑

h） 3号土坑 （PL4－3）

図示しなかったが、E－10区における土坑である。50㎝×40㎝の楕円で深さは25㎝で丸形の断面を呈している。

i） E－15、16区の撹乱地域の内に、わずかに遺構面を残す部分がある（Fig.14、PL5－1）。遺構は細い2条の溝だが、図示した如く共にその一部分の検出である。溝はそれぞれ3㎞の距離を保ち、共に南北方向を呈している。北側の溝は最大幅35㎝、深さ15㎝であるが、羽口の断片2ケが検出された。周辺から鉱滓少量と須恵器が採集されている。鍛冶遺構に関する遺構である。

j） W－7区（Fig. 9参照）に2条の溝状遺構と楕円の窪みがある。溝は共に南北に向いている。

k） 遺構ではないが、E－8区に大きな窪みと思われる深い落込みがある。Fig.10図中央部に示したものがそれで、落込みの幅は4㎞、深さは70㎝を測った。西側の発掘区では検出されないことから円形の窪みと考えられ、自然のものと推測している。形態はスリ鉢状を呈し、窪みの中間地点から底部にかけて多量の土器が検出された。

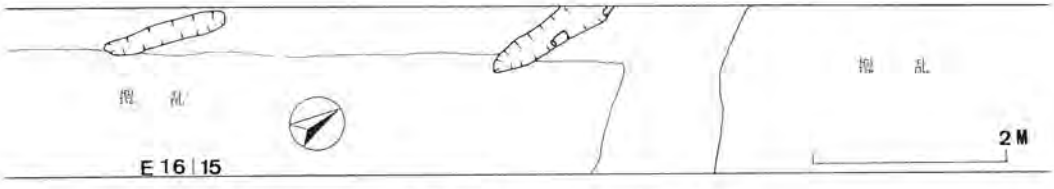


Fig. 14 E－15、16区 平面図

3 遺　　物

本遺跡から出土した遺物は、須恵器、土師器、木製品、羽口、鉱滓及び自然物がある。これらのほとんどはA地点からの出土であり、B地点から採集されたものは須恵器22片、土師器13片である。これらはいずれも撹乱層での採集である。

遺物の出土状況はＰＬ６に示したが、最も集中して多量に採集されたのはＥ８区の窪地であり、おそらくゴミ捨場的存在であったと思う。これと数量的には比較にならないが、次いで２号焼土坑上部である。その他は散発的であり、また、撹乱層での採集もあった。

ところで須恵器とは、大陸の技術によって生産されることになった高度な焼き物である。わが国では古墳時代の中頃から生産が開始され、平安時代の終末まで使用された。時代によって色々な器種があり、またその型態にも変化があるが、Fig.15にその型態の一部を示したので参照されたい。一方、土師器（ハンキ）は日本古来からの伝統に基づく焼き物であるが、この時期、須恵器の影響によってロクロによる成形が開始され、焼成も窖窯を用いての酸化焔焼成が行われた。須恵器と同様に供膳貯蔵用具の他、特に煮沸用具に供された。Fig.18に型態の一部を参考までに示した。

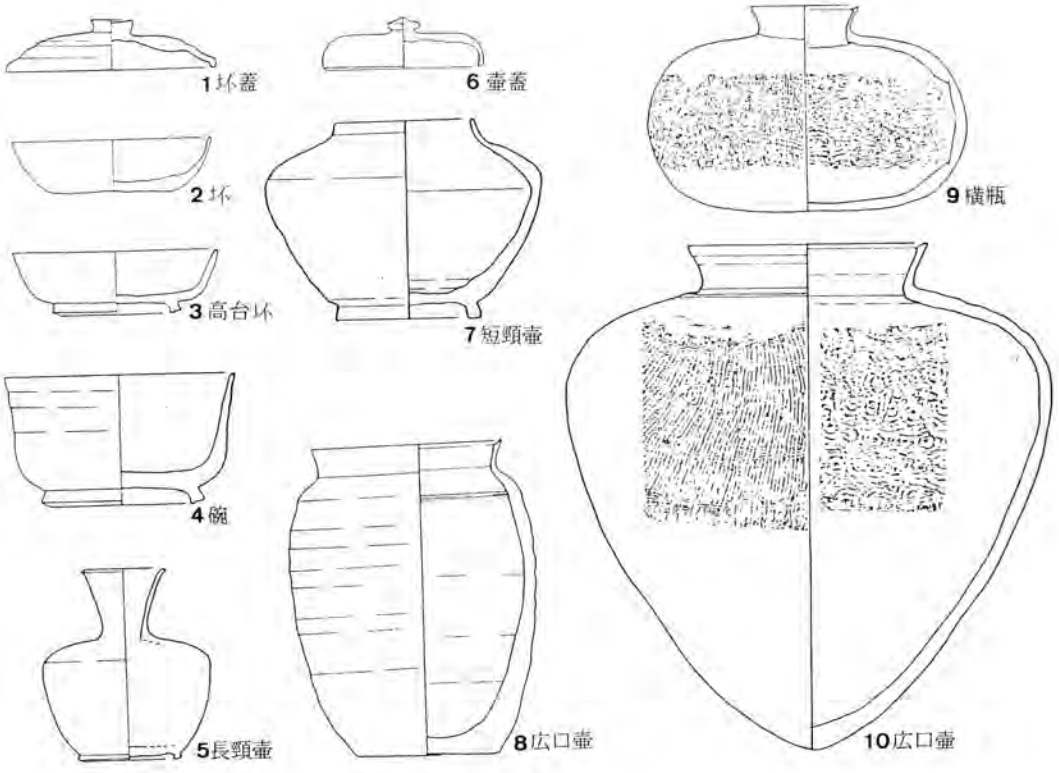


Fig. 15　須恵器、模式図

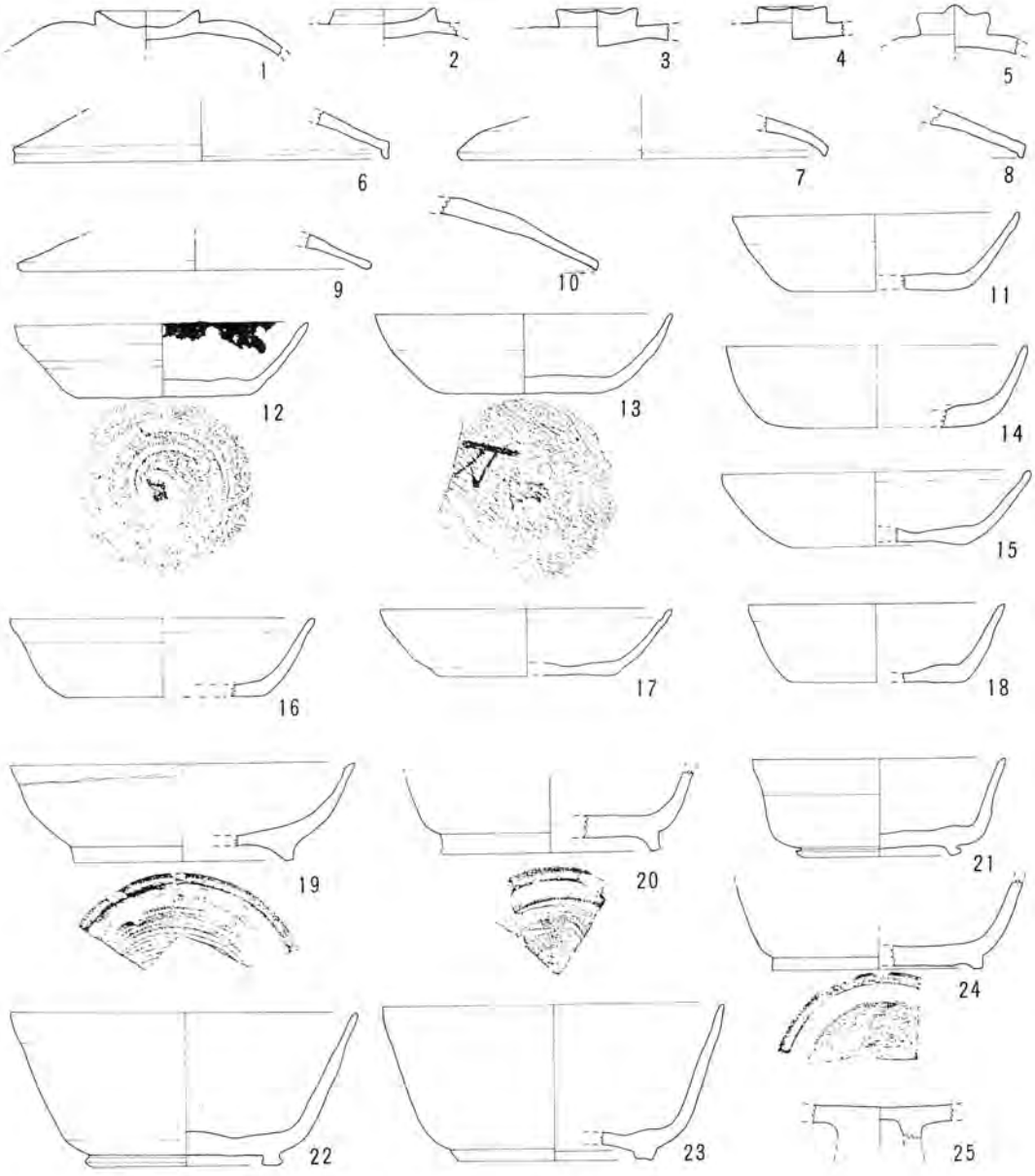


Fig 16　出土遺跡、須恵器（$\frac{1}{3}$）

1）須恵器

蓋　（Fig 16、ＰＬ７－１）

坏蓋であるが、図示した如くいずれも細片である。復元図によって計測出来るものは6.7.9の3点に過ぎず、それぞれの最大径は15.4㎝、15.4㎝、14.4㎝である。形態的にそれぞれの特徴はあるが、ここで6、7に関して細部を観れば、6の傘部は上からの加圧により流線型であるのに対し7は盛り上りを有する。着部は典型通りに下方へ折り下げられているが、6は端をさらに外側へ引き曲げている。10の着部は欠損したものであるが、9はこの折り返し部分を持たない特異なも

のと言えよう。

1～5は蓋の撮（つまみ）部分を残すもので、この5点が総てである。大別して3通りの特徴を有している。1、2は撮の径が4.3㎝、4.2㎝と大きくて、高さが0.5㎝、0.6㎝と低いことである。さらに中心部が深く窪んでいる。3、4はほぼ同形態で、窪めた中心部分がやゝ突出して周囲と同じ高さである。径は4の2.8㎝に対して3の3.4㎝が非常に大きい。5は高さが1㎝と高くなり、さらに中心部の突起が盛り上っている。

蓋類は図示したものの他に19片を数えるが、いずれも胎土は緻密で、焼成度も良好である。

坏　（Fig 16、ＰＬ７－２、３）

11～18の8点を復元実測出来たが、他に底部の細片157点、口縁部細片154点がある。8点の内多くは器壁の立上り度が低く開口的であるが、14、18がやや角度を増す。その為であろうか、特に14の腰部の丸味は顕著である。成形に当っては、ロクロ水挽、箆起し（箆切り）で、ロクロは左回転である。15、17は口縁部を内側にややおさえたもので、16は逆に外反させている。全体に底部の厚味が大きい。胎土は緻密であり、焼成も良好であるが、11のみが焼成不足である。

使用に当って、12（ＰＬ７－２－左）は灯明皿に転用されたもので、口縁部内部に炭化物（煤）の付着がある。灯明皿に転用されたものは他に2ケ体分がある。13は底部に墨書文字「万」の字が見られる（ＰＬ10－１）。

高台付坏　（Fig 16、ＰＬ７－４）

図示したものは紙面の都合上19、21の3点に過ぎないが、この他細片11点を数えることが出来る。なお図示したものの内確実に高台坏と言えるものは実のところ19のみであり、他の2点は碗類に部類するかもしれない。

19（ＰＬ右上）は丸味を有する器壁の立ち上りと、わずかに見られる受口状に外反させる口縁部に特徴があると言える。また底部に見られるロクロの切離し痕は回転糸切によるもので、付高台は内側を厚い粘土で補強している。20も回転糸切底を呈し、二次的に擦消し調整を行っている。口縁部を欠くためあるいは碗の可能性もある。21（ＰＬ左上）は口径10.2㎝に対し器高4㎝であるが器壁の立上り角度から見て浅型の碗に部類するものであろうか。以上いずれも素地は緻密で、焼成度も良い。特に21は見込みに自然釉がにじむ。

碗　（Fig 16　ＰＬ 5.及4、6の一部）

図示したものは22～24の3点であるが、他に細片5点がある。22、23は口径共に14㎝、器高は6.2㎝、6.3㎝とほとんど同様である。器壁の立上りは22は23に対してややゆるく開口的である。また22は器面及び高台など二次的調整が良いのに対して23は特に高台内の調整が不良である。なお素地、焼成共に良好である。24は口縁部を欠失しているため不明だがあるいは高台付坏かも知れない。前項20と同様に回転糸切痕と擦消し調整とが見られる。焼成がやや低温である。

高坏　（Fig 16、ＰＬ７－７）

25に図示した細片であり、現状では高坏と想定する以外にない。かすかに湾曲した底部に外径3.5㎝の脚部が見られる。坏部上面には緑色の自然釉が見られ、焼成は良好である。

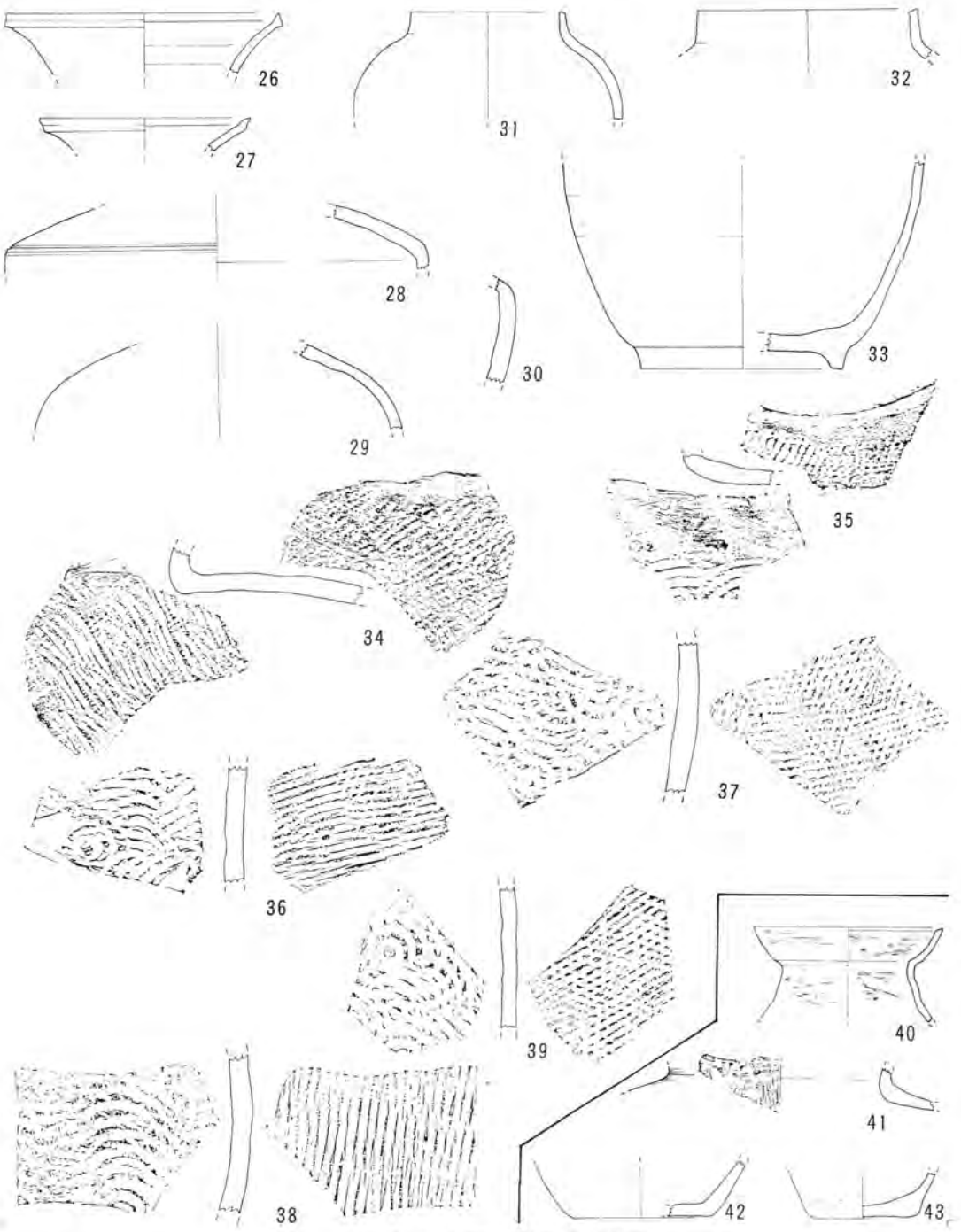


Fig 17　出土遺物、須恵器、土師器

No.26～39　須恵器　（$\frac{1}{3}$）

No.41.42　須恵器　（$\frac{1}{6}$）

No.40.43.　土師器　（$\frac{1}{6}$）

壷類（Fig17、PL7－8）

a）長頸壷

いずれも細片で実際の器形を知り得ないが、26～30が長頸壷と想定される。26、27は長い頸部の先端部における口縁部である。26は口径12㎝とかなり大型である。27は同じく9.5㎝であるが、大型に部類するものと言えよう。共に頸部を失っているが、朝顔形に外反する先端をつまみ上げる繊細な調整が成されている。素地、焼成共に良好である。28、29は肩部片、30は胴部片である。28は肩張りの典型と言えるもので肩部に最大径の18.6㎝を測る。また肩部に細い2条の沈線を有する。29は胴部に最大径の16.2㎝を有するものである。30は細片である。共に素地、焼成も良好で、30は自然釉がにじむ。

b）短頸壷

31、32の他に1点がある。いずれも細片である。31は口径7㎝、胴部の最大径12㎝で1㎝の頸がほぼ直立する。32はその頸部のみの片であり口径以外は測り得ない。口径9.7㎝高さ1.5㎝である。

33は有高台の壷の胴部から底部である。長頸壷、短頸壷のいずれとも言いがたいが、ここで記述した。高台径9㎝、胴部にロクロ痕を残す。図示しないがこれとほぼ同形の壷が2点ある。

c）横瓶

34は横瓶（ヨコベー）である。俵状の胴体を横にして小さな口を持つ。頸部付根部分の破片であり、計量などを知り得ない。表面にはカゴメ状の叩き文と刷毛目、内面は条線状叩き文で押えている。横瓶は当資料一片だけの出土である。

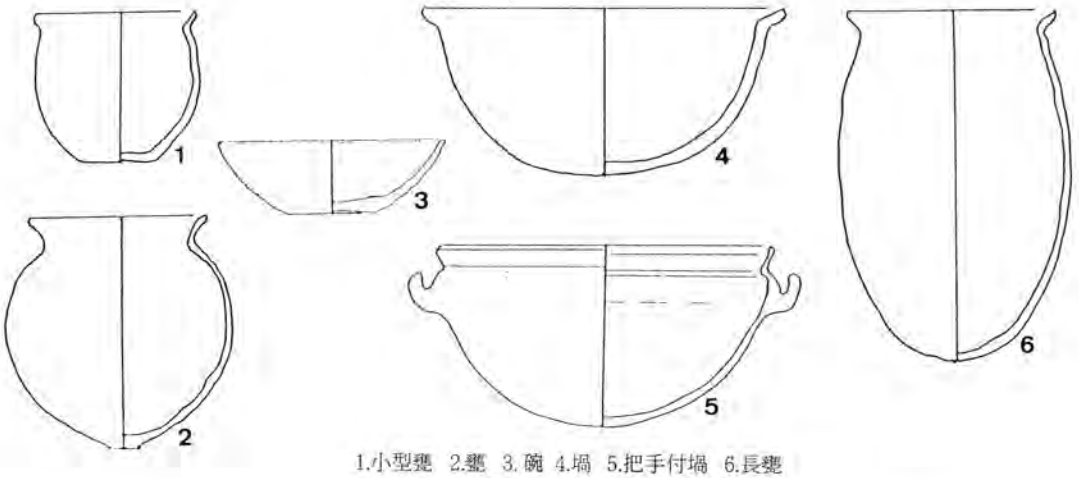
d）広口壷

35～38、41は大型の広口壷である。いずれも細片で器形を知り得るものはないが、丸底を呈する大型の壷である。Fig17の枠内に示したものは枠外のものと縮尺度が異なるが、この内の41が頸部の径を推定することが出来る唯一の破片である。この復元図によれば、径部の直径20㎝を計る。想定出来る壷の胴部における最大径は45㎝程であろう。35も頸部の破片であるが、前者とほぼ同様の計量となろう。その他図示したものは胴部の破片で、それぞれ成形時における胎土の締付け工具による紋様を示した。右側が外側、左側が内側の拓本である。ここで見るかぎり、外側は条線状の叩き目であり、35がこれに櫛目を加えている。内側の押えはいずれも同心円を基本とする青海波紋である。なお、41の頸部は縦位の条線状叩き目に横位のハケ目を施している。同類の陶片は図示したものの他108片が数えられる。

2）土師器

碗　（Fig19、PL8.9）

浅型の碗であり、形態上では須恵器の坏に同定されるものである。然しながら、須恵器坏に比較して底部の径に対する口径の比率が大きい。これらの形態は、計数的には大小様々であり、口径では47、49の12㎝、53、61の16㎝、57が最大で20.8㎝を測る。口縁部における特徴も様々で、



1.小型甕　2.甕　3.碗　4.堝　5.把手付堝　6.長甕

Fig 18　土師器、模式図

大方は器壁の立上りのままであるが、52、60が外反する。腰部は47、53の様に丸味を呈するものも見られる。器壁も44、60、61の如く非常に肉薄であるものと、53の如く肉厚のものとがある。成形に当っては、総てがロクロによる水挽で、底部の切り離しも、総て回転糸切法式に依るものである。

高台を有するものがある。64、71がそれであるが、いずれも底部のみの破片で全容を知り難い。

これらの内、二次的に灯明皿として転用されたものがある。46、55がそれであり、器内、あるいは内外両壁に炭化物が付着する。

この他、44、45には墨書文字が見られるが判読しがたい。（ＰＬ10－２、３）

黒色土器　（Fig 19、ＰＬ９－２、３）

本来改めて項を起すものではない。器種としては、碗、高台付碗（有台碗）、皿状器具である。65～71の７点の他に７点があり、この内65、71などの４点が内外両面を黒色処理し、他は内面だけである。後者を内黒土器などと呼ぶが、これは焼成中の高温の土器を取り出し、草などをつめて板上に伏せ、器面に炭素を吸収させて黒色化させるものである。前者の両面の黒色処理は焼成技術の進歩によって、窯内全体に炭素を充満させることから出来るものである。なおこれらの土器は、器面を特に良く磨き上げられている。

皿　（Fig 19、65）

前項に記述した黒色処理を施されている土器で、65がそれに当る。図示した如く細片で底部を知り得ないが、皿とした。当遺跡では唯一の器種である。口径15.5㎝で、腰部に一稜を有し、外反する浅い器壁で口縁部をわずかにくびらせている。器肉は薄く内外両面を黒色処理させた上質の器である。

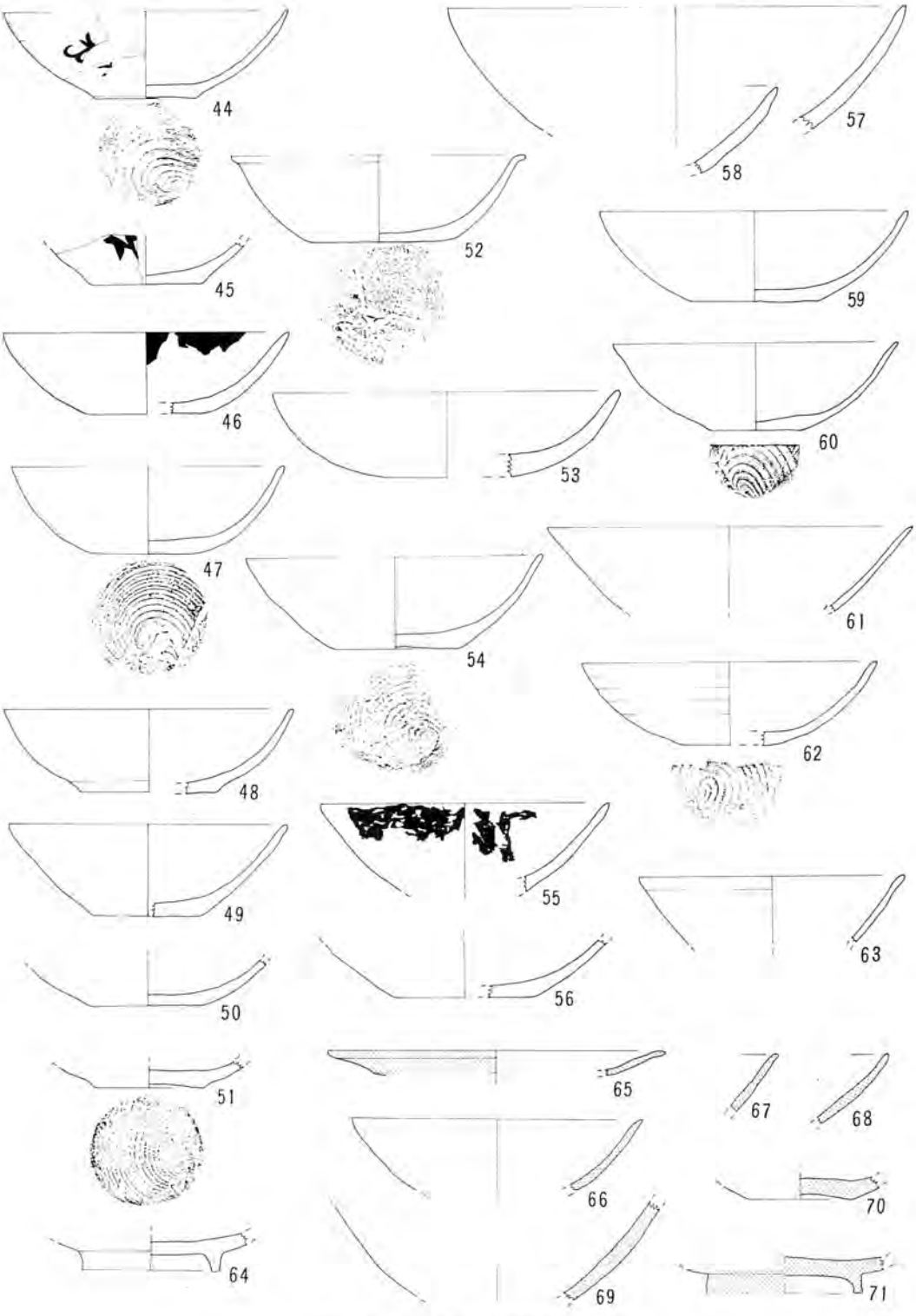


Fig19　出土遺物、土師器碗類（$\frac{1}{3}$）
（No.65～71 黒色土器）

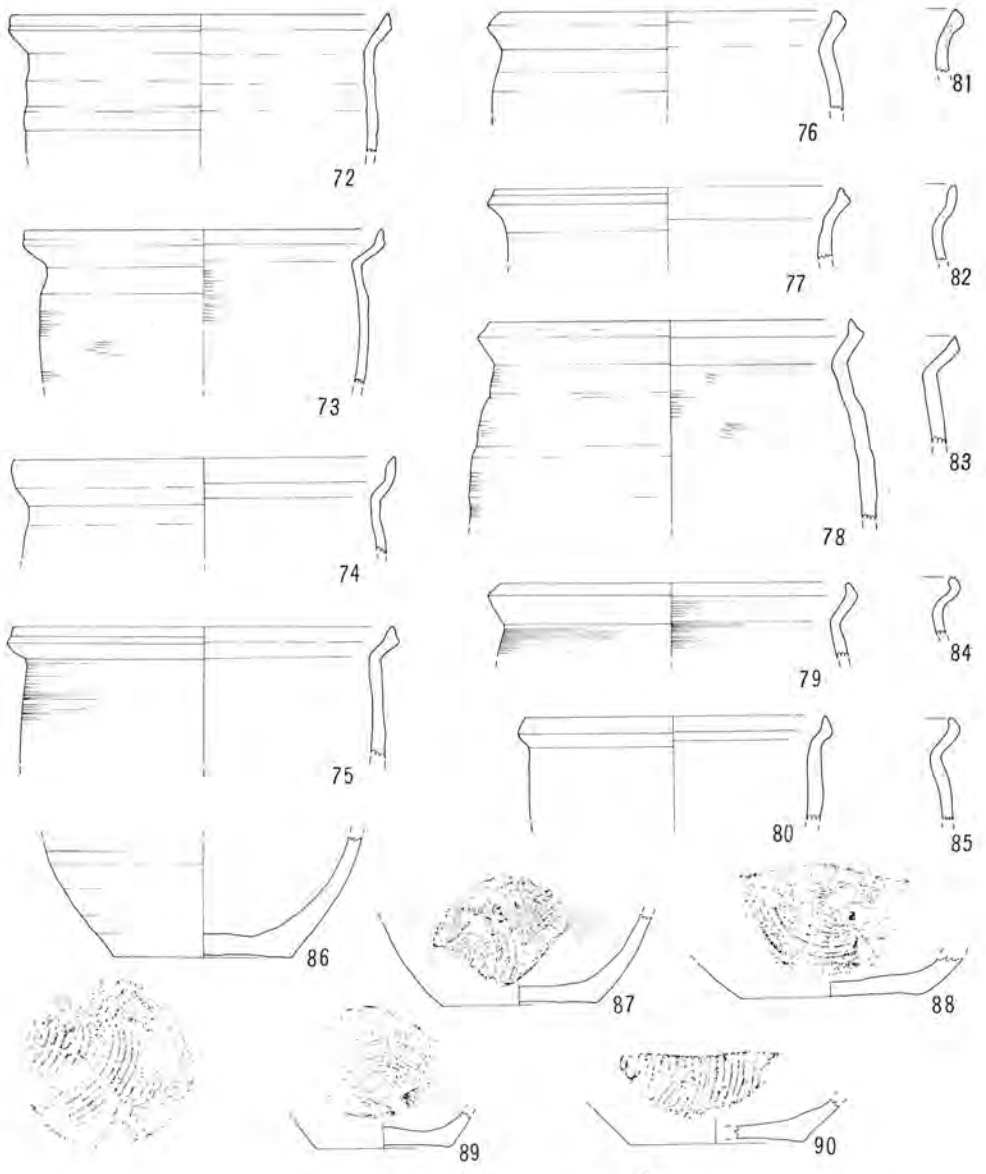


Fig20　出土遺物、土師器、甕類（$\frac{1}{3}$）

甕類

a）中型甕　（Fig20、PL11－1～4）

多量の破片数を検出したが、全容を知るに至るものは見られず、図示した如く口縁部と底部の断片に過ぎない。形態的にはくの字に外開する口縁部を有し、底部は平底である。これらの多くは口縁部に最大径を見、図示したものの内では78が胴部に最大径を見る。口径は80の11.8㎝が最少で74、75の15㎝が最大である。底部は同じく89の5.3㎝から88の7.5㎝までである。いずれもロクロ切離しでは回転糸切手法による痕跡を残している。口縁部における整型の細部では、いわゆる

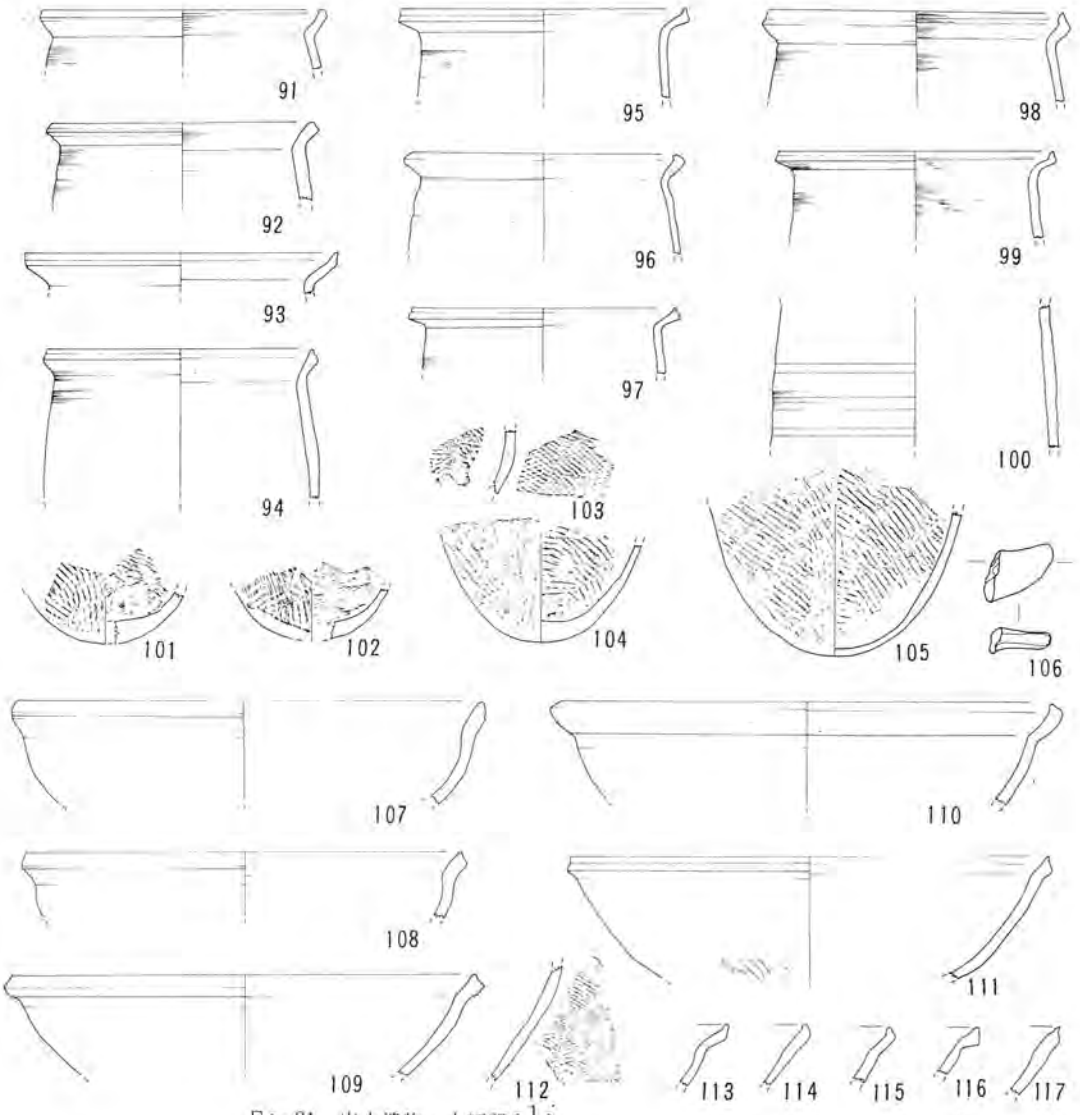


Fig21　出土遺物、土師器（$\frac{1}{6}$）
No.90～105 甕類　No.106 把手　No.107～117 鍋類

二重口縁を呈し、くの字に外反させた先端部を大なり小なり内側へ折返している。なお81、83等ではこの折返しがほとんど見えず、口唇部をおさえたぐらいにとどまっている。胴部の調整では刷毛目、横ナデを混合したものがほとんどである。なお72、78は胴部のロクロ痕が荒々しい。また81は口縁部の一部分のみに胎土を付け加えて整形されている。

これらのうち、内面に炭化物が付着するものが多く、それらは75、77～80、83、84、86である。なお図示したものの他に口縁部片は32点、底部片は49点がある。

b）長甕　（Fig21、PL11－5～8）

中型甕に比較して口径で160％以上を有し、丸底を呈する一群のものである。図示したものは細片のみで器形全体を知り有るものはないが、Fig18の模式図に示した様に胴長の形態を呈するものである。胴部に最大径を持ち、口縁部の形態は前者とほぼ近似するが、口唇部の折返しが少

なく、つまみ上げた程度のものが多い。口径は92、97が20.5㎝と最少で、93が24.5㎝で最大である。器面の調整では、それぞれ多少の異りは見られるが、基本的には一定である。それは頸部は横ナデあるいは刷毛目、胴部の上方までが同じく刷毛目と横ナデで、内側もほとんど同様である。胴部から底部は外面には条線状の叩目、内面には、ほぼ同様のものと、同心円状の青海波紋からなる。図上にはこれらの接点が明示出来なかったが、100は胴部に近い片であり、そのほとんどは刷毛目と横ナデであるが、残存する下部の1㎝たらずの間から斜状の叩目紋が現われる。紙面の都合上多くを図示出来なかったが、この他に口縁部170点、底部片12点が数えられ、胴部の細片は平箱5杯がある。

c）その他の甕

1）把手付甕（Fig21－106、PL12－1）

甕の本体は不明であるが、把手部分の残欠がある。106に示した様に、やや上向きの耳状で長さ4㎝、厚さ1.2㎝で、横断面は丸味を帯びている。甕の胴部左右に取付けられるものである。

2）その他（Fig17－40、43）

いわゆる未分類のものである。図面の縮尺の関係やスペース上、Fig17と前後して示した。40は、上向き気味の長い肩部と内湾気味に大きく湾曲する口縁部、さらに推測であるが、胴張りの器形に大きな特徴を有する。さらに器面の調整は内外面共に口縁部は水平の刷毛目、肩部は斜位の刷毛からなる。胎土はこれまでの甕類とは異なり、やや荒い砂粒を多量に混入させ、焼成も良好とは言いがたい不安定なものである。口径は17㎝を測る。

43はかなり肉厚の器壁をもつ底部残欠である。腰部の立上り部分にカキ揚げ状の強いタッチの刷毛目が見られる。また底部には箆による調整痕が見られる。胎土は砂質であり、全体の調成及び焼成共に良好とは言われない。この2点はあるいは時期を異にするもの、即ち時間を遡るものと考えておきたい。

堝　（Fig21、PL12－2、3）

全容を知り得るものはないが、口径に最大径を有し、現代のボール状のもので底部は丸底を呈し不安定なものである。口縁部の特徴は前項の甕類のそれと同じであり、強いて上げれば、その角度の相違があることである。器面の調整については、内外面共に同様であり、器の上半部は刷毛目、横ナデ紋を見、腰部以下は条線状の叩目紋が見られる。図示したもののほとんどは器の上半部であり、叩目紋を見るに至らないが、109、110、111に見られ、107は摩耗がはげしく腰部の調整痕は見られない。口径における計測量は、108の34.8㎝が最少で、110の38.0が最大である。なお、109、110の外面に炭化物の附着を見る。

3）その他

a）土製品

羽口（Fig22、PL13－1.2）

鞴（フイゴ）に接続する送風管の先端、即ち炉の下部へ風を送り込む口の部分を羽口（ハグチ）

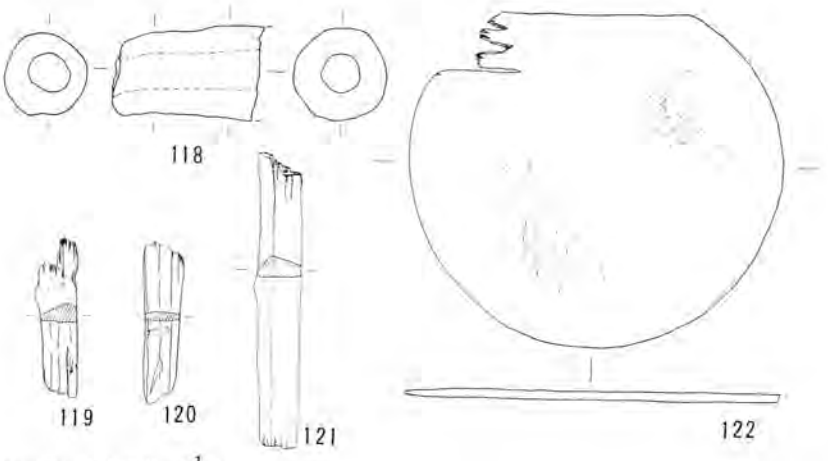


Fig22　出土遺物（$\frac{1}{6}$）
№118羽口、№119～121木片、№122木器

と言う。118に図示したものの他に8片が出土したが、5個体分と考えられる。またその出土地点はE—15、E14、W—16地区であり、その内先端部分は4ケ体を数える。118はA－E－15区の出土である。PL13－1に見られる如く、折断はしているものの、先端部の筒状を良好に保っている。残存する長さは12cmで、先端部はやや丸味をおびていて5.6cmと細いが、序々に径を増し、欠失部分では7.7cmを測る。内径は先端部が摩耗しているが3cmの径があり、後方では3.4cmを測る。先端部は使用のために焼きただれ、3～5cm程がガラス質に被われている。図示しなかったが、その他の羽口の内、1点は外径7cm、内径2.5cm、他の1点は外径8cm、内径3.5cmを測る。

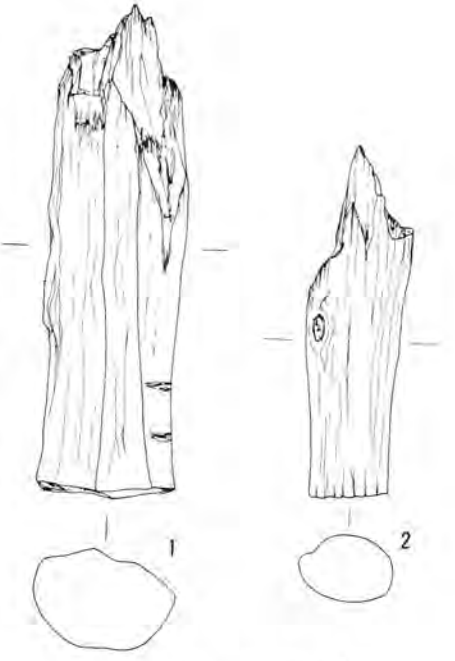


Fig23　柱　残　根（$\frac{1}{12}$）

b）鉱滓

改めて図示しなかったが、13点の鉱滓がある。羽口の検出したA－E－15、16区からの出土である。化学的調査は行っていないが、いずれも鉄滓であり、いわゆる鍛冶滓であろう。

c）木器、木製品（Fig22、23、PL14）

ごく少量であるが木器の一部分と、木材と推定されるものがある。119～121は何等かに使用されていた木材の一部分である。この内、120は薄目の板状に割られているが他の2点は桟状の材料である。いずれも杉或るいは桧材の断片である。122は直径30cm、厚さ0.7cmの円形で、器物の底板と考えられる。A－W－8区のピット内の検出である。一部分を欠失しているが、表面には微細な刃物傷を残すことから俎として転用されたことが知られる。

Ｆig23－１、２は柱の残欠である。Ａ－Ｗ－８区における柱列の遺物である。１は長径 22.5㎝短径17㎝、残存長さ79㎝で栗材である。２は同じく15㎝、10.5㎝、56㎝で杉材である。

ｄ）抗

数本の抗類の検出を見た。いずれも上層におけものであるが、１点がＡ－Ｗ－７の土抗内の出土である。図示しないが、先端を殺いいだもので、桜の丸材で径 6.5 ㎝、残存長さ 40.2㎝である。先端部が少々焼けている。

ｅ）果実（ＰＬ13－３）

ひょうたんである。Ａ－Ｅ－９の井戸状遺構の出土である。小型ながらほぼ完形を留めている。

4　ま　と　め

序章に記述したことではあるが、当調査は農道の拡幅工事に伴なう行政上の発掘調査である。したがって、拡幅工事の法線内のみの調査であり、遺跡を面として調査するものではなく、いわば線としての調査であった。したがって当調査に多くを期待することはもとより望むことは出来ない。しかしながら当遺跡の大まかな手掛りはつかみ得ることは出来たと思う。ところで、調査範囲が農道に沿っていることは言うまでもないが、農道の建設工程が昭和初期におけるもので、周辺の土を盛り上げると言う工法で行われた。したがって当然のことながら発掘調査範囲のほとんどは、すでに破壊されつくしたと言っても過言ではなく、わずかに旧状（遺構面）を遺す部分が認められた程度であった。

確認調査によって遺跡と推定されたＡ及びＢ地点は摘確に微高地であり、その中間は湿地帯が広がっていることが分った。当調査の結果、Ａ地点におけるＥ及びＷとも第１区の中間程より水田の基盤となるのは泥炭層であった。北側のＢ地点では、ここに報告した様に時期を異にする遺物の検出、及び確認調査報告にある如く縄文式土器の表面採集資料もあるが、主体となり得るものはＡ地点と同時期と考えられる須恵器と土師器である。ここでは同一遺跡とみなすことが妥当であろう。

出土した須恵器や土師器に見る年代はいつごろであったのであろうか。いまこれを明確にするには、出土資料に少々不足を来たすところである。須恵器については、まず第１に有台坏及び碗の成形に回転糸切りが見られる。この工法は当地域においては９世紀になって見られるものと言われている。なお須恵器での回転糸切りは非常に少ない。壷類のうち、特に31、32の短頸壷や、全体の形を知り得ないが肩張りの長頸壷は、８世紀中葉頃から９世紀に掛けてのものである。坏蓋の内 1.2 などの撮の形態は８世紀の所産である。またかつては横瓶も８世紀と言われていたこともあった。25の高坏は８世紀前半以前のものと考えたい。土師器については、Ｆig19の碗類が９世紀の指標とされているものである。また前述した回転糸切り工法を特徴とすることでもある。平底を呈する中型の甕類も形体や調整上から、８世紀から９世紀にかけてのものであるが、底部には回転糸切りが導入されているものも多い。須恵器、土師器に見られる年代の推定は以上の様

であり、したがって当遺跡の主たる時期は、8世紀後半から9世紀にかけてのことと考えられよう。また前述した如く、40に示した古式の土師器の検出や縄文土器の表採の報告などから、断続的な復合遺跡と考えておく必要性もある。

ところで、当遺跡出土の須恵器、土師器の生産は何処であったかは知ることは出来ないが、当遺跡より東方約1㎞の丘陵に“六兵衛沢須恵窯址”が報告されている。筆者等は現在のところ、これを確認出来ないでいるが、少なくとも新津丘陵の北東端には七本松須恵窯址群（新津市）があり、六兵衛沢窯址の背後には山崎須恵窯址（五泉市）がある。いずれ須恵器、土師器ともこれらの製品と思われ、筆者等が日頃調査のベースとしている揚北（アガキタ）の五頭山麓須恵窯址群の製品とは、器の胎土が著しく異なり、微砂粒を含まない密度のある胎土を用いている特色を見た。

当遺跡の少範囲の発掘調査で、高床式と推定される建物址が検出された。この時代の庶民の住居は前時代から継続された竪穴式住居が普通であった。この時代における高床式の建物は倉庫や公共的役割をもつ何等かの建物と考えられよう。また出土遺物の内、坏や碗の食器類に墨書が見られた。言うまでもないことであるが、この墨書は一つの家庭内におけるものとは考えられず、公共の場での目標とするものである。この様なことから当遺跡は単なる小集落とは考えられず、ある程度の街、都市と考えることが出来る。また小鍛冶と考えられる羽口や鉄滓が検出された。東方の丘陵にある居村遺跡などの大規模な製鉄遺跡群（新津市）等で生産された鉄が、ここで農耕具やあるいは武器に加工されたことは言うまでもないことであろう。この鍛冶遺構を思わせる羽口が2ケ所からも検出していることは、これが単に“村の鍛冶屋”的存在ではないことを物語ると考えたい。

この時期、新潟平野の各地に、これまでとは比較にならない程の多くの遺跡、即ち集落や市街が展開されていった。このことは単に人口の増加と言う自然発生的なことにはとどまらず、この時期この地域即ち、新潟平野がたとえば農耕と言う国家の政策などによって、各地から送りこまれた人々で沸き起っていた時期なのかも知れない。大沢谷内遺跡はこんなころに営みを持った遺跡である。

当調査は2年次共、季節的に不順な天候のもとで行われた。そのため特に現地での作業員の方々には御難儀をお掛けした。また調査に当って御協力、御援助賜わった多くの方々に謝意を申し上げるものである。

平成2年3月3日

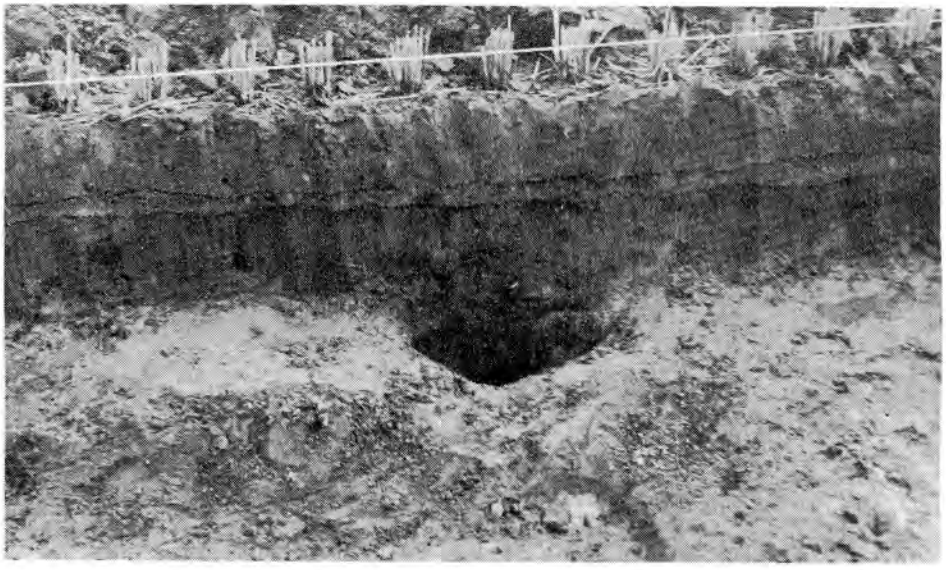
川　上　貞　雄

参　考　文　献

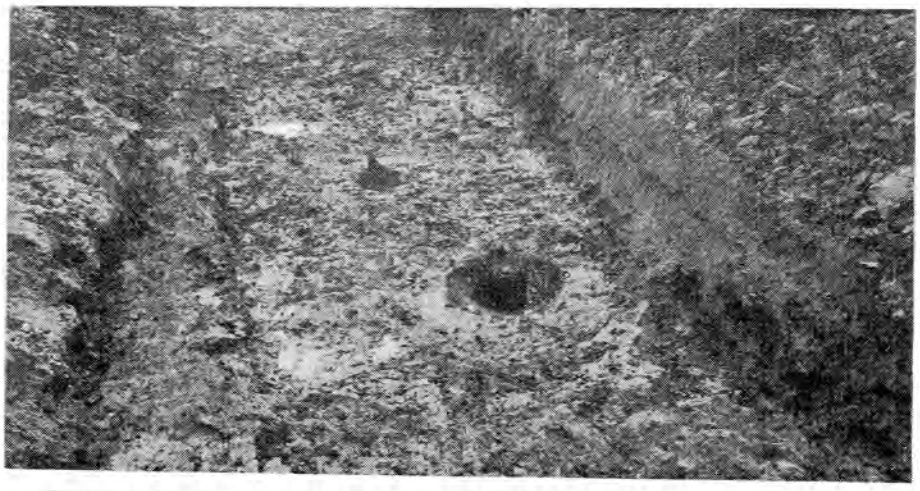
1.	『新潟県遺跡地図』	新潟県教育委員会	1979
2.	『新津市史資料編第Ⅰ巻』	新津市教育委員会	1989
3. 坂井秀弥他	『山三賀Ⅱ遺跡』	新潟県教育委員会	1989
4. 中川成夫他	『狼沢窯址群の調査』	笹神村教育委員会	1973
5. 川上貞雄	『山崎須恵窯址』	五泉市教育委員会	1987
6. 川上貞雄	『貝屋須恵窯址』	加治川村教育委員会	1982
7. 川上貞雄	『小曽根遺跡』	笹神村教育委員会	1989

1. 遺跡遠景　2. 同近景　3. 作業スナップ

PL 2



B地点遺跡　1. W5区ピット　2. 完堀



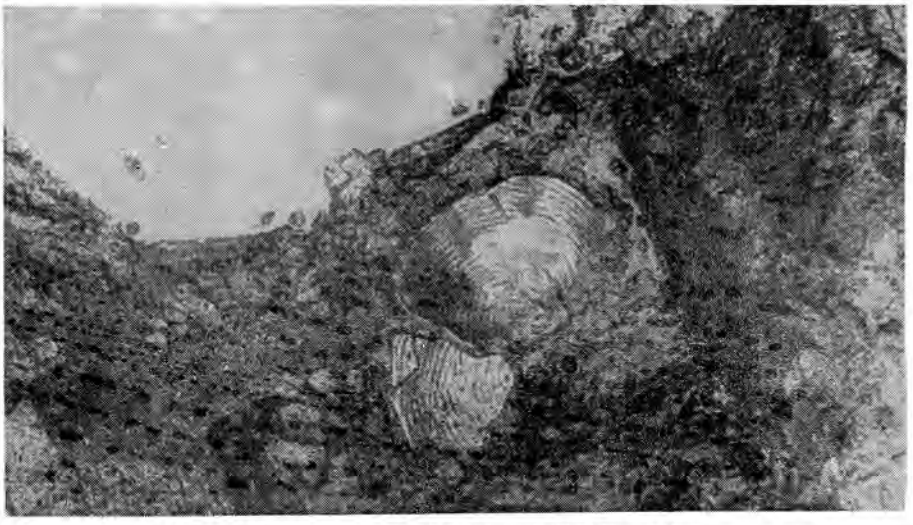
Ａ地点遺跡　1.　柱残痕列（Ｗ－８区）　2.　ピット群（Ｗ－７）
3.　ピット群（Ｗ－８）

PL 4

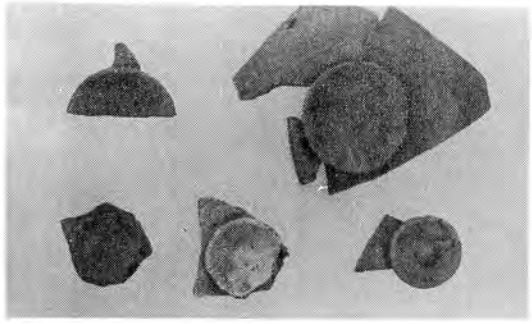
A地点遺跡　1. 井戸状遺構（E－9）　2. 焼土坑（E－7）
3. 土坑（E－10）

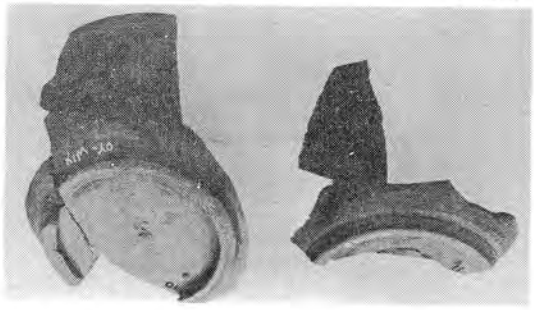
遺物出土状況　1.　溝状遺構内の羽口　2.　ピット内の須恵器と木器底板

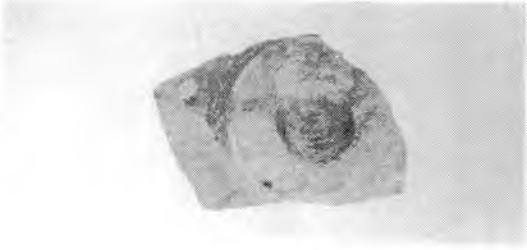
PL 6

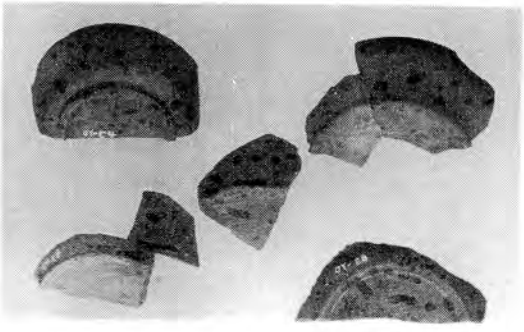


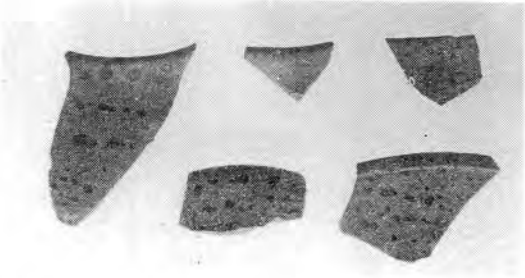
遺物出土状況　1.　2号焼土坑上の土器（E－9）
2.　須恵器坏（E－8）挿図No.12
3.　窪地内の土師器（E－8）挿図No.105



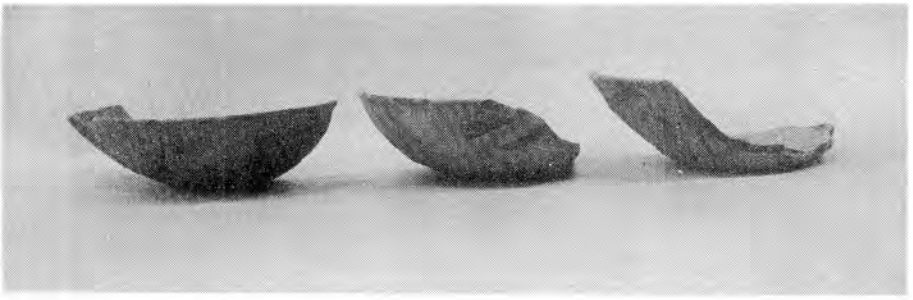




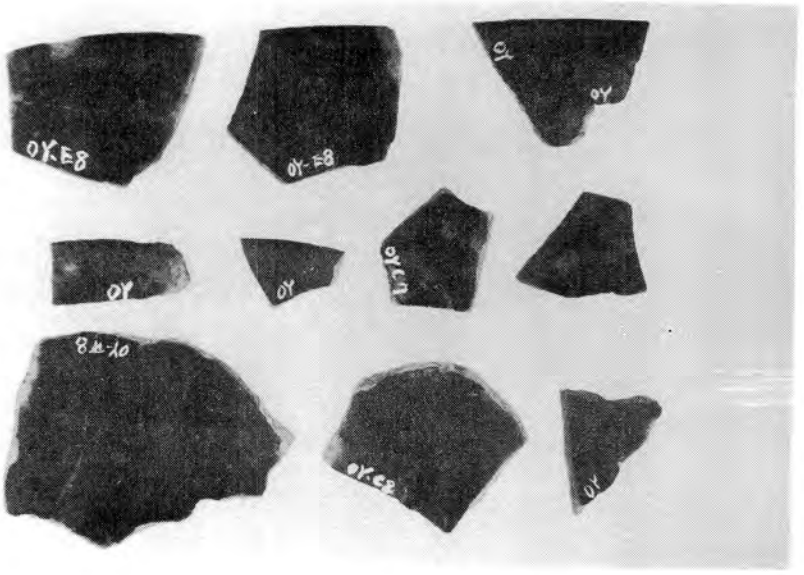


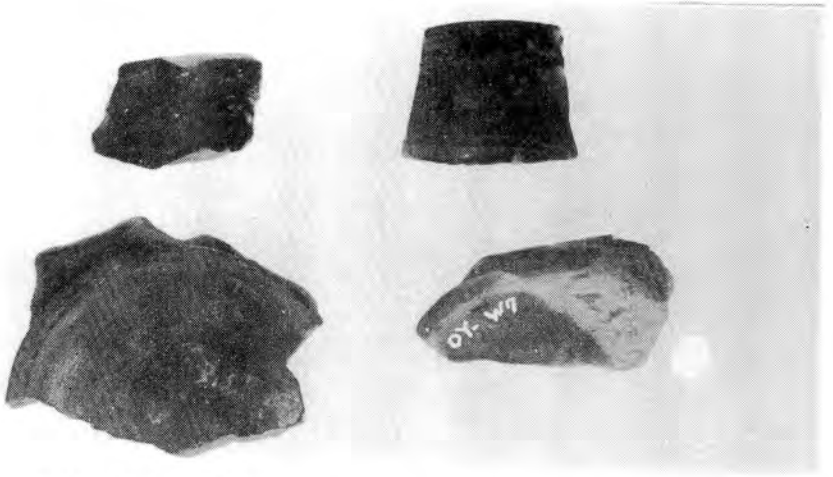


出土遺物（須恵器）　1. 坏蓋　2. 3. 坏　4. 高台付坏
5. 6. 碗（6の一部）　7. 高坏　8. 壷類



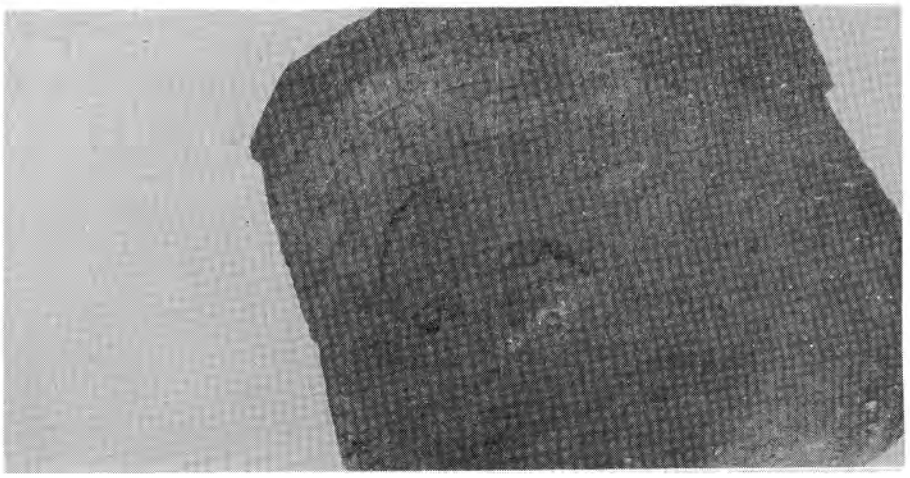
出土遺物（土師器）
　１～３．碗類（３は灯明皿に転用されたもの）

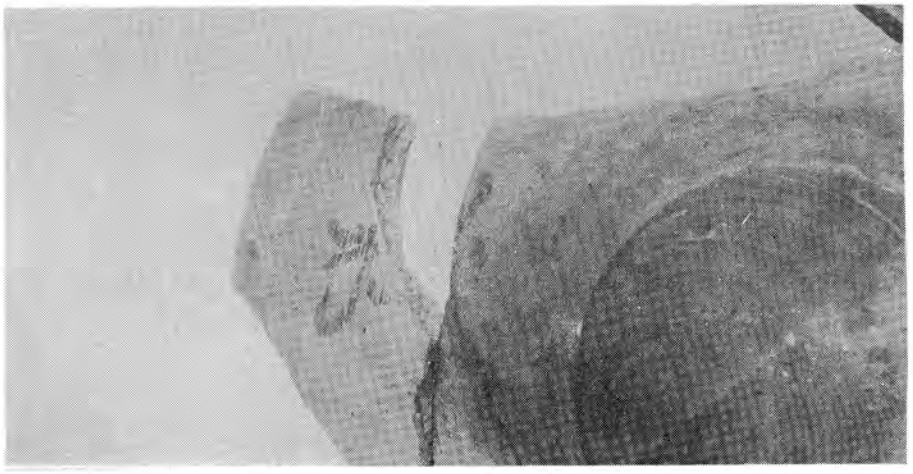


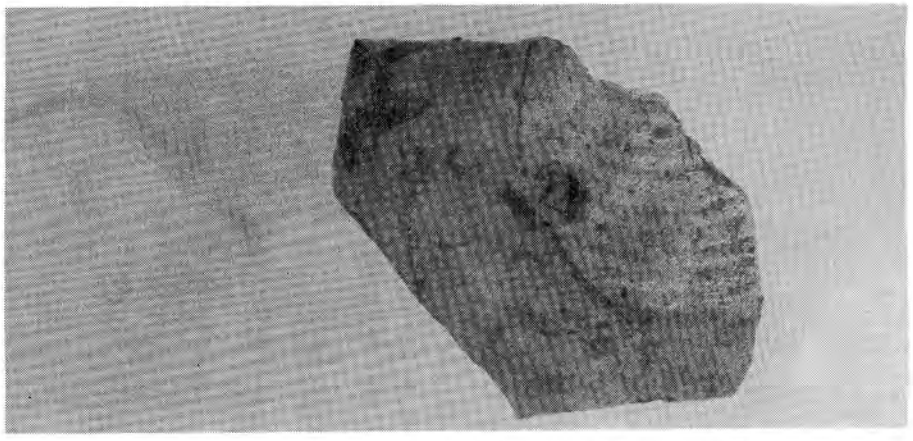


出土遺物（土師器碗類）
1.（左）高台付（右）糸切底　2.　黒色土器（内面のみ）
3.　黒色土器（内外面共）

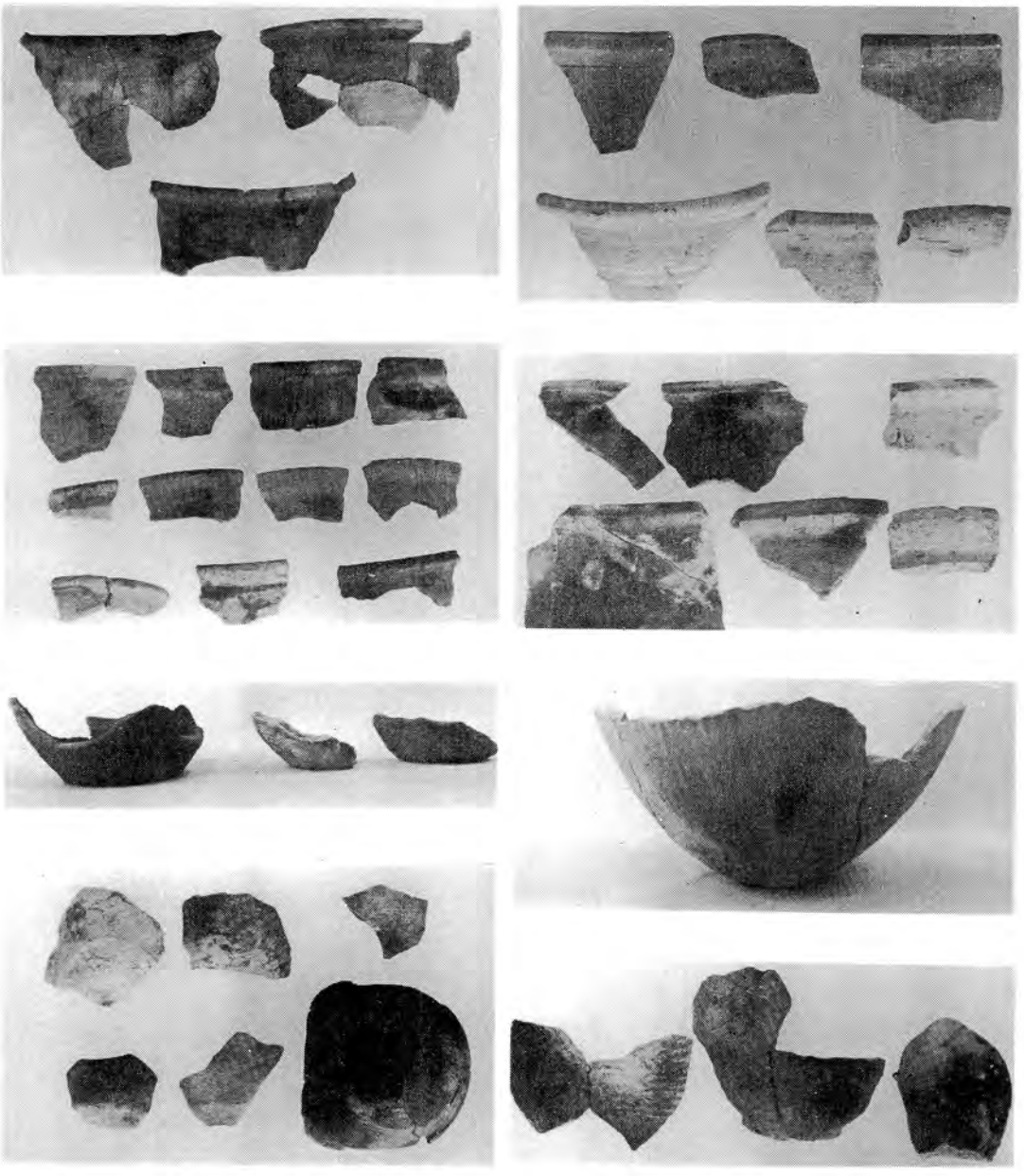
PL10





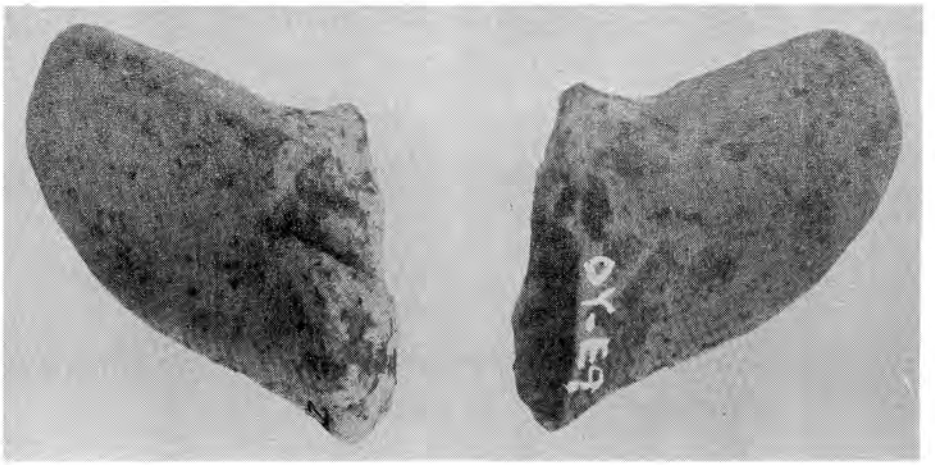


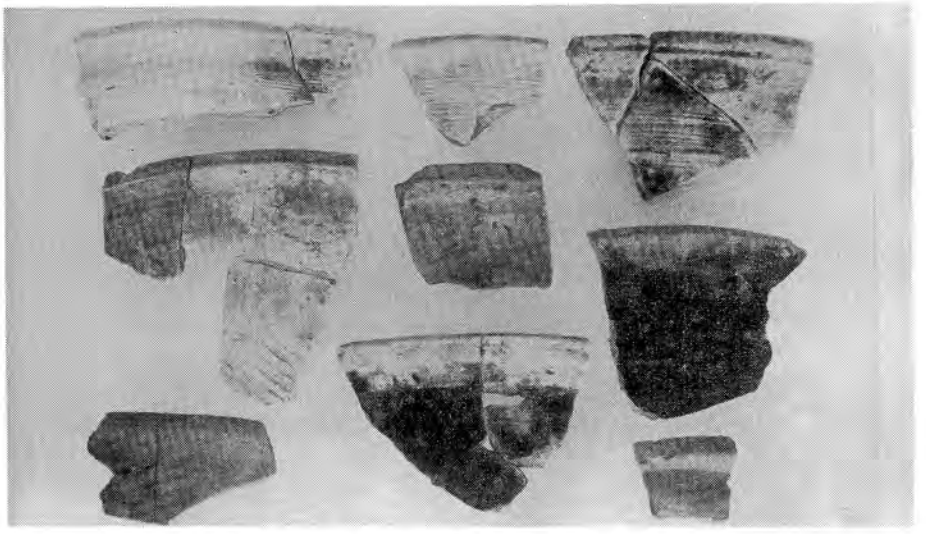
墨書土器　1. 須恵器坏（万）　2. 3. 土師器碗（不明）



土師器甕類　1～4.　平底甕類　5～8.　丸底長甕類

PL12

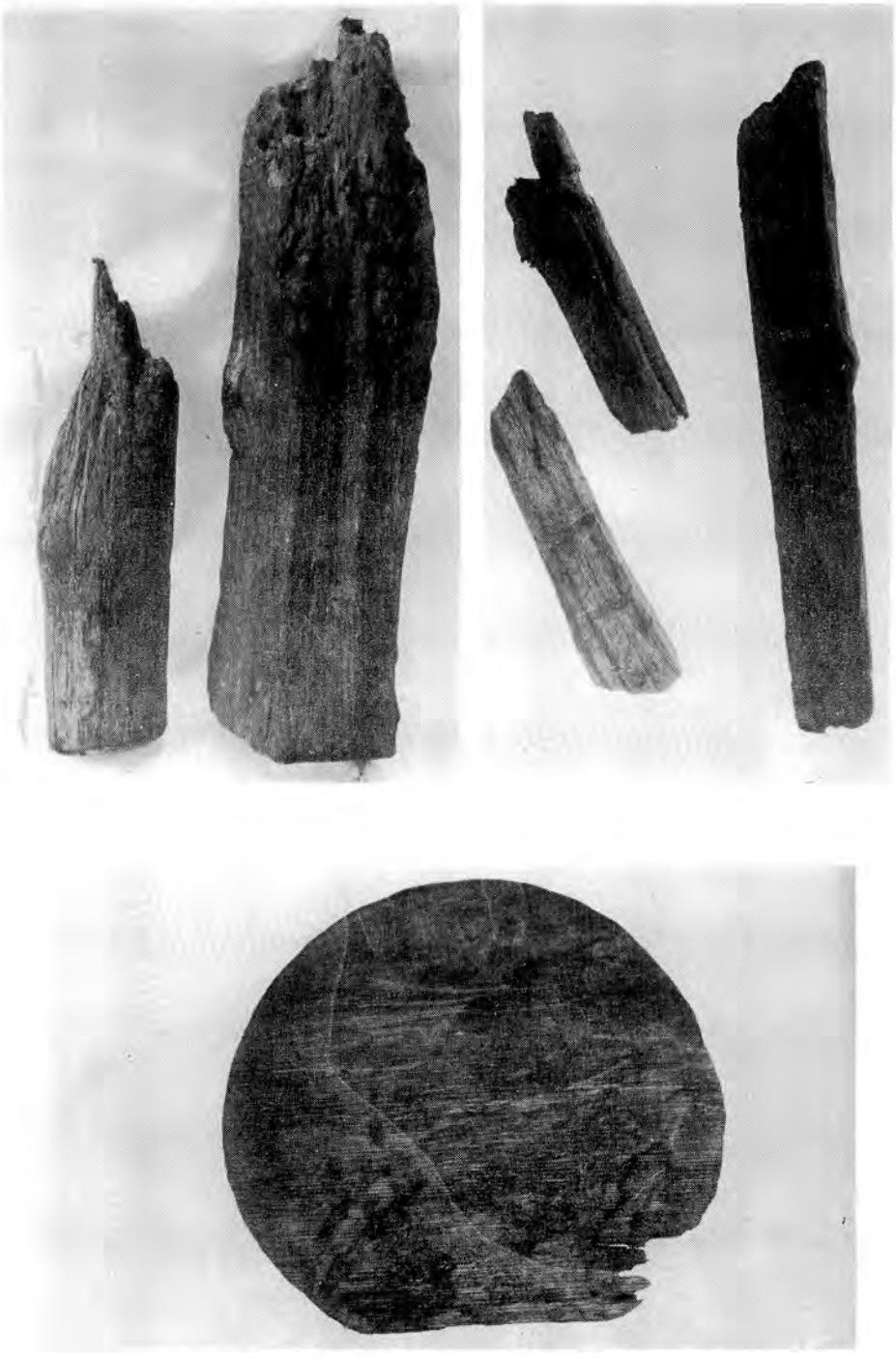




土師器　1. 甕の把手（表、裏）　2. 3. 塝類

1.　2.　羽口残欠　3.　ひょうたん

PL14



1. 柱残根　2. 板状遺物　3. 桶底

発行日　平成２年３月20日

大沢谷内遺跡
小須戸文化財調査報告書

発行者　小須戸町教育委員会
新潟県中蒲原郡小須戸町
大字小須戸 120 番地
TEL 0250 (38) 3111
印刷所　(有)玉　庭　印　刷　所